

---

ああっ女神さまっ After Stories  
タキオン・ブレイド

---

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

## 注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ああっ女神さまっ After Stories

### 【作者名】

タキオン・ブレイド

### 【あらすじ】

初めましての方ははじめまして。  
知っている方はお久しぶりです。  
タキオンことタキオン・ブレイドです。  
さて、いよいよ再開します。  
と……そのまえに。

この作品は二次創作です。  
この作品は二次創作です。

大事なことなので二回言いました。

ここからは注意事項です。

原作と違って、このベルダンディーはごはんも食べるしう〇ちやおしっこもします。

もちろん食べないで過ごすことも可能ですが。

そして時代設定なのですが、昭和ではなく令和で進行します。

つまり、スマホや16：9の液晶TVやLEDが普通に登場します。

褥ではベルダンディーの呼び名は英語風にベルと略します。これは螢一のみ許されています。螢一はあなたです。これもベルのみ許されています。

ではでは皆様ご愛顧の程を。

季節は十一月、初旬。空が蒼く高く肌を擦る風はすっかり冷たくなっている。

千葉県猫実市。人口二万の古い街並みと新しい街並みがごっちゃになったような、首都圏への通勤客も多いこの街。二人にとっては思い出の宝石箱。そしてこれからも暮らしていくであろうその上空で、人と女神の厳粛で荘厳な結婚式が執り行われていた。

きっかけは魔界のナンバー2、ハガルの謀反から始まった。大魔界長ヒルドを封印して、自らが大魔界長として地上階の「魔族のシェア」を一気に取り戻そうとしたのだ。しかしながらこれは間違いであった。

太古の昔から「神属」と「魔属」は「地上界のシェア」を狙って争い、互いに何度も何度も滅びかけてきた。

双方の滅びを防ぐために「神属」と「魔属」の間で契約が結ばれた。

「タブレット制」

神属と魔属の間で、双方の子供に命の共有の契約をさせ、その契約の記憶を消す制度。結果、（神属・魔属いずれかの）片方の契約者が死ぬともう一方の契約者も死ぬことになり、さらにその契約者が誰なのか分からなくなる。そのため、うかつに相手方の命を奪うと身内の誰かが同時に命を落とすことにつながる恐れがあり、神属・魔属の双方で殺し合いとならずに済む。

さらに「地上界のシェア」を今後均等に分割することで話し合いは済んだ。

しかしながら、ベルダンディー達が地上界に常駐することでこのバランスが崩れていた。

それでもうまくやっているつもりだった、とはヒルドの言葉である。

ハガル達にはそれが気に入らなかったらしい。

さらにもう一つ、大魔界長は任期終了が迫っていた。魔界法第2061条21項、「大魔界長は任期終了とともにその生命も終了する」

大魔界長ヒルドが死ぬ――

ハガル達にはヒルドに恩がある。だからこそ急いでいたのだ。前述したように間違いであったのだけだ。

地上界に残っていた千分の一のヒルドの分体は、三女神、ウルド、ベルダンディー、スクルドに「救援要請」を発した。三女神はこれを受諾、ベルダンディーのセイフティとして螢一も同行した。後になって思えばこの螢一の行為がすべてを決定づけたといってもいいだろう。ちなみにこの日は螢一の誕生日だった。ベルダンディーからのプレゼントは時計、24時間の文字盤をもつ、コスモノート「旅人の時計」だ。

ヒルドはさらに千分の一の分体を螢一に預けた。「これが切り札となる」と。ハガルに接近しそれを使うことで彼女の身体をコントロールする。ヒルドの授けた「作戦」によって女神と人間は行動を開始した。見送り時にヒルドが螢一にキスしたことでちょっとしたトラブルはあったが。

螢一はヒルドから貸し与えられたグリユーエндеスヘルツに乗って、女神達は自力で旅立った。

魔界への門を開けておく最大開放時間は六時間。

「まあ……保険、ってどこかな」ヒルドは何気なく呟いた。

魔界に赴いた一行はエイワズの案内により、これから向かう部屋の中の主を倒して次の部屋の鍵を手に入れなければ先へ進めない事を知る。

暗闇の支配者、アールヴァル。

破壊の支配者、スリュム。

機械の支配者、モックルカーヴィ。

強欲の支配者、エイワズ。

そして、魔界のナンバー2ハガル。

彼女らの目的はベルダンディーの神力を削ぎ落とし、神力が殆どゼロの状態をつくりだしてから、代わりに魔力を彼女の身体に注ぎこむことで、ベルダンディーを魔属にすることが目的だった。神属のエースであったはずの女神が魔属のエースとして魔界の理想世界を造る。

ハガルの能力は、目を合わせた者の頭脳に直接干渉する力である。脳に「自分の存在がなくなった」と認識させれば、対象者は精神が死ぬ。

螢一とベルダンディーはハガルの奸計に見事に嵌ってしまった。

螢一はハガルによって両手と両足を奪われ、所持していた百万分の一のヒルドを内包するペンダントも奪われてしまう。

ベルダンディーは最後に残っていた僅かな神力も吸収され、天使のホーリーベルも卵に戻されてしまった。

「あなたに耳より情報です。あなたにはもう何ひとつ残っていません。あきらめてください」

声をかけるハガルになすすべもなく女神は意識を失った。

絶望する螢一の中から百万分の一のヒルドの声がした。出発の時に口づけした千分の一のヒルドから、彼の中に入り込んでいたのだ。エイワズの部屋でベルダンディーが復活したのはなぜ？

「護符とは守る力を封じたもの。人への想いは守る力。想いの力は守る力の強さ。この力は螢一さんの想いの力——」

ベルダンディーの身体に魔力を注ぎこむ直前、感覚を奪ったはずの螢一が飛び出して女神を救う。

螢一がベルダンディーに送った「指輪」が護符となって女神を守ったように。ベルダンディーが螢一に送ったコスモノート「旅人の時計」が護符となったのだ。それは女神の力を込めた護符。女神の愛の証。

手足を取り戻した彼に驚愕するハガル。

「なぜ一介の人間ごときが私の術を破れるんだ！」

確かに螢一がいたからこそ他の四人は破れた。破れることが予定だったとしても。

「ああ……そうか、こいつがいるからいけないんだ。最初から殺しておけばよかったんだ」

表情には呆れと殺意があった。

「最初から殺しておくべきだったんだ！」

このままでは螢一がハガルに殺される。

ベルダンディーは世界で一番大切な大好きな人を失う。しかし今の彼女に神力は残されていないかった。

迷いは一瞬、女神は決断した。

「螢一さん、これは最後の手段です。この先、何があっても私を信じてくれますか」

「ははは、信じるも信じないも、これ以上信じられる相手が他にいるだろうか」

「螢一さん、では、私の言う事にすべて「はい」と答えてください」

「はい」

「森里螢一は一級神二種非限定女神ベルダンディーとの間に締結し

た契約の解除に同意する」

「（え！？）……はい」

螢一の周囲で何かが壊れる音がした。

彼が訝しむまもなく続けるベルダンディー。

「これにより森里螢一は契約条件を満たしたので、新たな契約の提案が受けられます」

「はい」

「森里螢一は一級神二種非限定女神ベルダンディーと真の契約、すなわち私と結ばれることを望みますか？」

「え？」

い、今、なんて……？

「ただし次の条件を拒否される場合はこの契約は無効となります。契約者はいかなる試練にも望むことを誓い、これに合格しなかった時、当該女神との接触を生涯にわたり禁ずることとする。これを承諾しますか？」

……何？ 試練て何？

混乱して黙り込む螢一。

しばしの沈黙があって、再びベルダンディー。

「私もこの提案は避けたいんです」

螢一は少し頬を赤らめながらも真剣な表情で答えた。

「はい……」

「そうですね、拒否するという選択肢もありますよね」

「そっちじゃなくて！」

えっ、と驚いた表情をする女神。

「言ったじゃないか。信じるって。信じてほしいって言いながら、

俺のことは信じないの？」

「あ……」



まったくこの人は……。

互いを信頼すること。贈りあった想いのこもった品物。想えば長い二人の時はこのためにあつたのだ。

「螢一さん」

「はい」

「氣を確かに持ってください」

「え？」

「これより誓いのキスを実行します」

ベルダンディーは真剣で不安でそして嬉しかった。心臓の鼓動が高鳴っている。今から「その生涯を共にしたい」と心底願った相手と真実のキスをする。顔を赤らめながらも唇をよせた。

人と女神の唇が重なった。

どこまでも甘く柔らかい唇の感触。

その刹那、螢一は混乱の坩堝にいた。

（なんだ！！　なんだこれ！！　これはなんだ！！　脳が焼ける  
血が燃える！！　何もかも　溶けていく！！　こんな　……　気持  
ちがいいなんて　こんなにも　恐ろしいなんて　これが　神の　ベ  
ルダンディーの　こんなの　いつまでも　もう無理　キスが　……）  
つまるどころ「情報量」の多さに脳が処理しきれないのである。  
過負荷により螢一の意識は暗転した。

「はっ」

目を覚ました彼にベルダンディーは安堵した。万が一にもそんなことはないと確信しながらも、このままだったらと想うと不安だったのだ。

「螢一さん、大丈夫ですか？」

大丈夫と答えようとした螢一は目の前の情景に驚愕した。

一面の花、華、花…。

「うわっ、これは一体!？」

見えている範囲全部が花畑。花で埋め尽くされていた。

「力がほとんど無いはずなのに」

「いえ、これは螢一さんとのキスにより起こる、精神の物質化現象なので力は関係ないんです。ましてやそれが真実のキスであるなら、その効果は計りしれない」

「その、真の契約って……」

花の中に二人を見失ったハガルが騒いでいる。

ベルダンディーは己の唇に人差し指をあてた。

「螢一さん、この先は私が」

決意の表情。

だがその表情に螢一は違和感を覚えた。

「なんだろう。ベルダンディーが今までとは」

彼の知らない女神がいた。

「ベルダンディーが違って見える」

「？」

「あ、いや……その」

ベルダンディーの瞳。

（なんだ……）

ベルダンディーの唇

（なぜだ？）

ベルダンディーの胸元。

（なぜ急にベルダンディーが艶かしく見えるんだ？）

なぜだろう、見ていると胸の動機が抑えられない。今まで感じたことのない感覚。これは……。

騒いでいたハガルだが解決策を思いついたようだ。

その時、螢一の中の百万分の一のヒルドが合図をした。

ヒルドは螢一にキスした時に分身を乗り込ませていたのだ。

（螢一くん）

はい。わかってます。

「ベルダンディー」

「はい」

螢一はベルダンディーにキスをした。

「女神の加護を、俺に！！」

「こんな、え！！ うそ！？ 螢一さんが、え！！」

大きく噴き上がる大量の花。

ハガルの背後を取って、腕を掴み、耳元へ。

百万分の一のヒルドは螢一の中からハガルの耳の中に飛び込んだ。

「何をしやがる！燃やすぞ！」

——アイバブコントロール。

「え？ヒルドさま？」

百万分の一のヒルドがハガルの肉体を乗っ取った。

「新魔界長ハガルの権限においてここに宣する。旧魔界長ヒルドの拘束を解き、大魔界長の地位を回復する！！」

ハガルの抵抗虚しく、ヒルドは宣言した。

「解凍」

魔界の少し離れた地にある、花の蕾のような封印装置がゆっくりと開いていく。

ヒルドは大魔界長の地位を取り戻した。

裏魔界法。大魔界長の地位を失いそして取り戻したものは任期がリセットされる。ヒルドは任期で死ぬことがなくなった。

帰ろうと言い出すウルドにストップを掛け。

「あらあ、すんなり帰れるとでも？」

何をしたのだと問うウルドに、自分は何もしていない、むしろ

ベルダンディーがしたのだと。

「ねえ、あなた真実のキスをしてしまったんですものね」

ベルダンディーは胸の詰まる思いがした。術を破るためとはいえ大変なことをしてしまった。

「今まで契約を履行するために、螢一くんを騙っていたのだから」

「違いますっ！！ 騙してなんか——」

螢一が、ベルダンディーは嘘がつかないとフォローするも、言わないことでも騙せると。

「ねえ、螢一くん。ベルダンディーのこと好き？ 欲情する？ 抱きたいと思ったことある？」

螢一は顔を真赤にして否定した。

「ほんとはあるけ……あれ？」

え……思ったことあったか？ いままで？

「ないんじゃないの？ 健康な若者なのにねえ」

なんだ……。なんだこれ。真実のキスをしたときから——

心配そうな面持ちで名前を呼ばえられて、ベルダンディーを見た瞬間。

大きく動揺した。鼓動が跳ねた。

手を伸ばしてくる愛しい女神から、反射的に飛び退いてしまう。

「違……んだ」

「違うわいわよう。螢一くんの封印されていた欲情が開放されただけのこと」

互いに異質である人と神の交わりに天上界は厳しい制限を設けている。だけど螢一は契約してしまった。「君のような女神にずっとそばにいて欲しい」契約を守るためには交わらせてはならない。だから、今まで螢一の心を操作してきた。肉欲を欲望を抱かないように。

契約のために人の心まで干渉するのが神のやりかたである。

「螢一さん、私は……」

だましていなかったのは本当。でも契約のためにこのシステムが動いていたのを知っていたのも本当のこと。私は、螢一さんに甘えていたんだ。とても言い訳なんて出来ない。でも。私は螢一さんと一緒にいたい。この気持も本当。私は……なんて……。

響き渡る音楽。

「どうやら律儀にも魔界まで降りてきたようね」

呟くヒルドのそばから空中が爆発した。

天界から魔界へ異種族恋愛審問官が降りてきた。

「大変な事になっているようですね、ベルダンディー。まさかあなたの時に呼び出されるなんて。これも運命の女神なればこそなのでしょうか」

女神集合体代表取締役アンザス。ベルダンディーとスクルドにとっては実母であり、ウルドにとっては義母になる。彼女は職務に公平であるために降りてきたのであって、ベルダンディーの味方をするためではないことを宣言する。

アンザスは大天界長ティールの後妻だった。

ヒルドはティールと「別れた」のではなく「別れさせられた」のだ。

「見せてもらうわよ、私が越えられなかった壁を、君が越えられるかどうか」

神属の定めた異種族恋愛審問システムに。

アンザスは持っていた杖を巨大な門に変化させた。

ジャックメントゲート  
裁きの門である。

「人間と女神は本来交わるべきではないのです。我々は幾度となくその悲しい結末を見してきました。故に我々は資質を確認する試験を

設けました——そうです試すんです人とは左様に弱く脆い。そしてそれは女神もまた同じ。この試験は人のためだけではありません。人と女神双方の恋愛検定です」

試験に合格できなかった場合。人と女神は 生涯出逢うことができない。出逢おうとどんなに頑張っても運命制御機構が全力で阻止する。また、通るのを拒否した場合、元の状態に戻るが、ただし今後一切の恋愛行為を禁止される。手を繋いだけで死ぬ。

ベルダンディーは一度開けば二度と戻せぬパンドラの匣を開けてしまったのだ。

「改めて問います。森里螢一くん。どうしますか拒否しますか。それとも通りますか？」

裁きの門を通るか否か。

螢一はほんの少しの間考え込んでいたが。

「やります」

「この中で起こることはあなたの精神を崩すかもしれない、それでもやるのですね」

確固たる決意の表情で彼は応えた。

「やります!!!」

「森里螢一、裁きの門への入門許可申請、受理しました。——では、一級神二種非限定女神ベルダンディー。あなたは裁きの門に入りますか」

私に門に入る資格が……？ 螢一さんを欺いていたというのに。

螢一は後ろに立つ女神を振り返ってサムズアップをしていた。

そう……私はこの人を守りたかった。この人を守りたくてこの選択をした。なら道はきまっている。

「門に入ります」

「……わかりました。一級神二種非限定女神ベルダンディーの裁き

の門への入門許可申請、受理します」

戻って来られないのに、やはりそう答えるのですね。

そう、この門をくぐって戻って来たものは皆無だった。

「ゲートオープン」

開いていくジャッジメントゲート裁きの門

中に入ろうとする螢一をアンザスは呼び止めた。

「お待ち下さいな螢一さん。ひとつ聞かせてください。こんな信頼の失われた状態で、入ってしまったていいのですか」

「失ってる？誰が誰への？」

「あなたがベルダンディーのですよ」

キョトンとした後、彼は笑って応えた。

「それは、勘違いされています」

門の向こうへ消えていく二人を見送って。

「勘違いって。どういうことですか？」

視線を向けられたヒルドは、さあ？とばかりに両腕を広げてみせた。

「無事に戻ってくるかしら」

「異種族恋愛審問官としては職務に公平であるだけです」

「では、母親のアンザスとしては？」

ふうっ、とため息をつくアンザス。

「あの娘の泣き顔は見たくありませんわね」

ジャッジメントゲート裁きの門の中に入った二人は、人の姿をしたゲートの案内

により、試練に送り出された。

「裁きの湖畔へご案内なの」

二人は足元から転送ゲートへ飲み込まれていく。

最後になるかもしれない。ベルダンディーは螢一に必死で呼びかけた。

「螢一さん！ごめんなさい、でもだましていたわけじゃないんです！  
私は螢一さんと！」

「ベルダンディー！」

転送ゲートへ消えていく二人を見送って、ゲートはその場に座り込んだ。

「戻った者のない道だけれど。待ってみるの。もし戻ってきたら、  
信じるってなんだかわかる気がするの」

裁きの湖畔。

ここは過去の世界で一切の干渉が許されない。

そこで二人が見たものは、吟遊詩人と湖の女神の悲恋の物語だった。

螢一は吟遊詩人の中で、ベルダンディーは湖の女神の中で、二人の様子を「見せられて」いた。

湖の女神はもとは人間だった。湖に生贄として捧げられ、「何者か」の声によって「このまま死ぬか」「人々の幸せを選択を持ってその手の掴む助けとなるか」と選択を迫られた。以来、彼女は女神となったが、湖に縛られ離れることはできなくなった。

二人は出会い、互いに恋をし、恋はやがて愛情となった。しかし残酷な時は「別れ」と繋がり、吟遊詩人の「老衰」による「死」となって訪れた。

愛しているならあなたを飛び立たせなければいけなかった。ごめんなさい、わかってはいても私はあなたといたかったの。

俺は君と出会ってここにいることに後悔はないんだ。

吟遊詩人は生涯で最後の詩を歌う。

見ゆるは渚……

耳に届く潮騒……

髪をくしけずる風はかすかに青に……



君と見る蒼

君と聞く碧

君と行く砂はま

歌の間、湖の女神は青い砂浜と白い渚を確かに見ていた。

吟遊詩人は息絶えた。

湖の女神は海へ行こうと立ち上がり、しかしかなわなかった。無情にも湖の底に封印され——物語は幕を閉じた。

そして螢一とベルダンディーは裁きの湖畔から帰還した。

涙が止まらない。

伝えたい思い。

伝わらない思い。

残すもの。

残されるもの。

その先にあるもの。

ゲートが二人に話しかける。

「どうだったの？あれがあなた達の結果なの。あなた達はその悲しみを知ったの。その悲劇をみたの。それでもまだ二人が結ばれるのを」

何者かがゲートに干渉した。

「さらに君はベルダンディーに不審を抱いているはずだよ」

「え？」

ぽかんとする螢一。

「え？じゃないだろう。君に黙って抑制していたことだよ」

「なんだ、君も勘違いしていたのか」

「な……に……」

「俺がショックを受けていたのはベルダンディーに辛い思いをさせていたからだよ」

驚くベルダンディーとゲート。

「ベルダンディーは俺を守ろうとしていてくれたんだ。俺の不用意な一言が原因なのに、そんなにまでさせてしまったのが申し訳なかった。だけどそれは、そこまでして「一緒にいたい」と思っていてくれるということなんだ。——そんな女神をもっと好きにならずにいられるだろうか」

これが「森里螢一」という男である。どこまでもまっすぐでバカ正直。そしてどこまでも優しい。

呆けたような顔で見つめてくる女神に、螢一は焦ったように顔を赤くした。

「ごめんなさい……螢一さん。私、もう一つ黙っていたことが」

女神たちは困っている人を探しその人が救済に当たるかどうかを見ている。そこでベルダンディーは見ていた。ずっと螢一を見ていた。運が悪くて、不器用で、一生懸命で、優しくて。ずっと見ていた。ずっと応援していた。

「私、その時から螢一さんに恋してたの」

彼の顔はトマトも白旗を掲げるほど真っ赤である。

「ありがとう。螢一さん、あなたを好きになってよかった」

「ベルダンディー」

いい雰囲気の二人の間にゲート（であったもの）が割って入る。「待て、ちょっと待て。まだメインの質問が残っている。あの結末が訪れることが分かっているのに、それでもなお、共にあり結ばれることを望むのか」

螢一はゲートを見つめ直した。これは……。

「どうして分かっているんだ」

「わかるさ神だから」

「それはおかしい」

「何がおかしいんだ」

「君は嘘をつけるのか、さもなくば思い込みか」

「どういふことかな」

「もしも全てが決まっているのなら、裁きの門なんて必要ないじゃないか。通り抜けられる可能性がある。ゆえに、未来が悲劇とは限らない」

「む……ぐ……。確かに思い込みはあったようだ。可能性——それは確かにゼロじゃない。しかし君たちはあの悲しみを繰り返す可能性は考えないのか？」

虚を突かれたような人と女神。

「ほら、やっぱり怖いだろう。無理をすることはないんだ。螢一くんだってベルダンディーを消したくはないだろう？」

「確かに悲しかった。後から後から湧いてくる悲しみの泉だった……あんなに悲しい気持ちには触れたことがない」

「そうだろう。だから」

「でも、その何十倍もの幸せを感じていたよ」

女神も同調する。

「私ものです。心地よい安らぎと確かな信頼を感じていました。それは幸せの道標、それは笑顔への扉」

「だからむしろ感謝している。この先の幸せの光とかけらを教えてくれた、裁きの湖畔に」

やれやれまさか、あの状況から喜びと幸福を捉えるとはな。

「それでもなお、別離の時にあの悲しみがあると知りながら、ともに歩む決意がある？」

「……ベルダンディーの言葉を俺は覚えているんだ」

『悲しみの大きさは愛情の深さの証明あかしなので。悲しみを恐れ

ていたらなにも愛せないわ』

「そうか……そんなことを……。」

「それはその時俺が気づかなかった、ベルダンディーの覚悟。その言葉はきつと今この時のため。そんな覚悟に対して覚悟を持って応えずにどうするんだ」

「ゲートはその胸のうちで。」

「覚悟か……それがどれ程のものであるのかな……。」

「螢一はゲートの正体がゲート本人でないと見破った。」

「いったい君は何者なんだ？」

「なかなか恐ろしいな君は。——久しいな、ベルダンディー」

「……!! まさか!! お父さま!？」

「びっくりして驚愕してテンパる螢一をゲートであったものは見て。」

「こいつおもしろいなあ」

「混乱の中で螢一は思わず。」

「お父さん、娘さんを僕に下さいっ!!」

と叫んでしまった。

「って、うわあ、なにを言ってるんだあっ!!」

「……!!」

「ベルダンディーはいろんな感情が混じり合ってフリーズしている。」

「なんだ、いらぬのか」

「え!?! いいんですか!?!」

「いやだめだけど」

「がっくりと両腕を地面につく螢一。同時にベルダンディーは再起動した。」

「あらためてゲートは。」

「このような姿であることは詫びねばならぬが、お初にお目にかか

る。大天界長ティールだ。——おめでとう。君たちは試練に合格した」

ティールは顔を見合わせ喜びをともにする二人に。

「だが、父親と見破られてしまったては易々とはここを通せないな。ここは最後に、父親の壁も乗り越えてもらうとするかね。なるほど君たちは覚悟を見せてくれた。裁きの門はそれでいいだろう。しかし父親としてはまだ不足だ。なぜなら、螢一くんはまだ私に行動を持って示してくれてはいない。我が娘と結ばれたのであれば、奇跡のひとつでも起こしてもらわねばな」

ベルダンディーは呆然と。

「そんな、裁きの門を通るのだって充分奇跡なのに」

「確かにちょっと驚いたけどな。だが奇跡とは大天界長に、「そんなばかな」ぐらいのことを言わせねば、奇跡とは呼べまい」

「そんな……そんなのどうやって……」

呆然とする螢一。

「お膳立てぐらいはしてやろう。君の得意分野でな」

ティールは彼のBMWを再現した。そして攻略不能とも思われるコースを作り出した。コースアウトは無限の奈落。落ちれば命はない。

スタートに立つ螢一。ゴールにはベルダンディーがいる。

「ここを走ってベルダンディーのところまでだどりつけたら奇跡だろう？君はこのコースを三分以内に走りきるんだ」

「初見で三分！！ そんなの絶対——！！」

サーキットレーサーはまずコースを知る。コースの全体像を知らないのは圧倒的に不利だ。

「だからこそ奇跡だ。だが、普段の君なら不可能ではないよ。どうする？やめるかね？」

「……やります。やってみなければわからない。ベルダンディーのために奇跡を起こせというのなら起こしてみせますよ!!」

彼は漢の顔をしていた。

「螢一さん……」

「三分以内にゴールしないと失格。落ちても失格、チャンスは三回あげる」

最初の挑戦、螢一ははじめのカーブでストップしてしまった。チャンスは三回ですよ。ベルダンディーの声援にこの回をコースを覚えることに振り分けた。しかし難しいカーブで奈落の底に落ちてしまった。次の瞬間、螢一はスタート地点に戻っていた。タイムアップと同時に戻されるようになっていたのだ。

「君は運がいいな」

「そうだ……確かに死んだと思った。今までバイクに乗ってきて何度もやばいことがあったけど、あれは味わったことない……」

足が震えた。

「怖かった」

まだ死の恐怖じゃない。震えることも出来なくなると思うけどそれでもやるかい？

やるに決まっている。

ほう、震えるその足で？

「ベルダンディー！応援頼む!!」

「螢一さん！がんばって——!!」

声援により足の震えは止まり心に「勇気」という灯火が戻った。

「よし、届いた」

二度目の挑戦。受け取った「勇気」を胸に果敢にコースへ挑んでいく。

「女神の加護があってなにを恐れるんだ!!」

しかし高低差の激しい難関S字シケインで失敗した。奈落の底の水面に激突し——死んだ。今度は時間もたっぷり残っていた。

そう、螢一は「死」の感覚を味わった。覚えている、記憶している、身体のすべてが崩れ壊れていく感覚。

ティールは彼の身体を瞬間修復することで擬似的に「死を体験」させたのだった。

「自分は死なないとしても？私は君に三回チャンスをあげると言った。故に次に失敗した場合は助けられないかもしれない。今度は本当に死ぬかもしれない——とは考えないのか？」

だけど……だけど、俺はただの人間だ。特別な力があるわけじゃないし、奇跡を起こせるなんて思えない。でもそれなら、だからこそ俺の全力を、総てをぶつけなくてどうするんだ。

一方、ゴールのベルダンディーは。

螢一さんが落ちた時本当に怖かった。足が震えた。息が止まった。本当に大切な人を失うという恐怖を、私は本当には理解していなかった。二度と会えないとしても、螢一さんには生きていて欲しいと思う。だけど同じぐらいに、螢一さんと一緒にいたいと思う。だけど螢一さんは走ってしまふ。私のために走ってしまふ。だから言えない。走らなくていいって言えない。私はわがままです。——私は女神失格です。

ティールは、螢一がまだ走れるとは思っても見なかった。擬似的に「死を体験した」のだ。人間は本能的に死ぬことを恐れる。だからこそ螢一がまだ立ち直れると思っただけでなかったのだ。

それも娘のため……か。だが、見せてもらおうか。

「どうする？ここでリタイアするか」

「やります！！」

「よし！！じゃあ、三回目行ってみようか。——と言いたいたいところ

だが、バイクが戻ってないな。何かのバグかな？すまん、もう一回作るから——」

「あ——」

天空に浮かぶ二台のバイク。黄金と白銀のバイク。

驚愕する一同の前に、封印されていたはずの湖の女神が現れた。

「あなたが落としたのは、この金のバイクですか？それとも銀のバイクですか？」

「お前！どうやって！」

「ゲートさんお静かに願います。業務中ですので」

「お……おう」

湖の女神は螢一を見下ろして。

「私は問うているのですよ。君が落としたのは金のバイクか銀のバイクか」

「え……あの、金とか銀のバイクじゃ走れないんで、俺のバイク返して下さい」

笑顔を浮かべる湖の女神。

「おめでとう！あなたは正直者なので、この金と銀のバイクを差し上げます！」

螢一は焦っている。大事な試練の最中なのに相棒となる「普通のバイク」が失われては、ここでタイヤとなってしまうではないか。

「え！？ いや、あの、こ、困ります！俺の、普通のを返して下さい！！」

「まあ、なんと無欲な。本当にいいのですか？」

「はい是非とも」

「では代わりに別のことでサービスしましょうか」

湖の女神は腕を一振りした。

「では戻しますね。しゃられらく」



ポン、と音がしそうな勢いで螢一のバイクは復活した。

「どうでしょう」

「おお、これこれ！」

ティールが騒いでいる。

「あら、なんですか？」

「おまえ……どうやって……出た」

螢一とベルダンディーも同じ質問をする。

「それはね、私が絶望から開放されたから。聞こえていたのよ、あなた達の声——あの絶望の淵で見えた姿」

湖の女神はベルダンディーを見て。

「あなただったのね。だから分かった。彼の思いは、願いは私が消えることじゃなかった。彼を語り継ぐこと、それが私の取るべき選択」

「待て待て！封印が解けたのはいいとして、あの湖に縛られた湖の女神が、どうやってここに来たんだ!？」

「どうやってもなにも……」

湖の女神は封印の中で、長い年月をかけ己の選択の力を磨いていた。自らの道をも選択できるように。

「どんな場所でも選択した場所に湖ごと出現できるように」

ティールは驚いて禁断の言葉を口にしてしまった。

「そんなばかな！」

「あ……」

「言った……」

「え？」

「ばかになって」

ムキになるティール。

「言ったかもしれないが!! それは湖の女神のことであって、螢

「くんに向けたものではないぞ!!」

螢一はひき気味に。

「やっぱり走らないとだめですか」

「当然だ……では三回目、ラストステージだ」

待って下さいと湖の女神からストップがかかる。

「まだ正直者へのご褒美をあげてなくて——」

「ああ、いいけど。パワーアップでもするのか？」

「いえいえー♪」

——それは湖水の選択 あるいは蒼き陽光——

湖の女神はティールの作り出した奈落のコースを、緑あふれる豊穡な大地へと変えた。

「コースは変えてませんよ」

変えてなくてもこれでは奇跡にはならない。主神命令である。すぐにもとに戻せ。

「いやです。第一にこれも彼が正直であったゆえの出来事であり、  
正当な業務です」

「む……」

「第二にあなたは主神とおっしゃいますが、明らかにゲートですよ  
ね」

「これは……訳あってハッキングしているのだ。主神であることには  
間違いはない」

「では、左手の平の主神の証を見せて下さい」

「う……無理」

「ならば、あなたを主神とは認められません」

わかったよ!! 業務に励みたまえ!! いじけて背中を向け座り込んだ。

「螢一さん、走ってきて。今度は楽しんで」

「はい……」

螢一は忘れてはいけないものを思い出した。

走りを楽しむこと。相棒のバイクとともにワクワクすること。

運命のラストステージ。バイクのエンジン音がコースの風を切り舞う。

「ははは、このコース最高だ!!!」

高低差の激しい難関S字シケインは後輪をわざと滑らせることでクリアした。

そして坂になっている直線。

「ん、ちよっと浮くかな？」

直線の先にS字コーナーと池があった。

「おっと、緩めて間に合わないなら、予定どおり、飛べえええ——っ!!!」

空中を舞うバイク。見事に池の先の路面に着地して再び走り出した。

見ていたティールは思わず口走った。

「そんなばかな!!!」

「言いましたね。「そんなばかな」って」

娘の指摘に啞然とするティール。

そして——螢一はベルダンディーのもとにゴールした。

抱き合う二人。

「ありがとう、ベルダンディー。信じてくれなかったらきつと最後まで走れなかった」

「いいえ、私の方こそ。私のために頑張ってくれて……ありがとう」  
ベルダンディーは改めて想う。この人を好きになってよかった。

この人を愛してよかった。私は間違っていなかった。

手を繋ぎ喜び合う二人の間から湖の女神が覗いていた。

「わぁ」

「ふふふ、おめでどう」

あなたがいなかったら奇跡は起こらなかった。ありがとうございました。

湖の女神はちょっと呆れ顔で。

「やあねえ、まだわからないの？」

奇跡を起こしたのはあなたたち。奇跡とは人が起こすもの。

「あきらめない心が奇跡そのものなのよ。だから、私からもありがとう」

湖の女神もあきらめなかった。あきらめず封印のなかで己の力を磨いた。だから奇跡はなかった。

「もういいわよね、ゲートさん」

「ああ、充分だ。メダルを授与しよう、森里螢一くん」

「ありがとうございます」

（これ、なんか意味があるのかな？）

「君ならあるいはなれるのかもしれないな。神に」

ベルダンディーー心は揺れ動く。

もしそれができるなら。できるなら、でも……。

優しく握る螢一の手が、微笑みが、決心させた。

そうだ、私は「この人」を好きになったんだ。

「お断りします」

宣言する螢一にティールはむしろ面白がっているかのようだった。

「ほう、ベルダンディーーとずっと一緒にいられるのにいいのか？」

「正直それはすごく魅力的なんですけど……ベルダンディーーは人の俺を好きになってくれたんです。だから俺も人のまま好きでいたいっていうか、あの過去の湖で見た幸せな時間が俺にも訪れるのかもしれないと思うと、それが楽しみで」

よかった、受け継がれているよ。あなたの思い。届いていたよ、あなたの心。

湖の女神は幸福に包まれた。

「そうか……残念だが、合格だ」

「え……」

「最後にちょっと試してみたただけだ。君の揺るぎなさは本物だな」  
握手を交わす二人。

「娘をよろしく頼む」

「はい」

——試しの星は晴れ渡り 狭き谷は虹の向こう 絆は固く時を繋ぎ  
契約は大地に立つ 刀は鞘に 日は西に 愛は懐に あるべき者  
はあるべき場所へ 行くべきものは旅路の果てへ——  
ティールの法術で構築される巨大な門。

「さっき渡したメダルをここにはめれば帰還の扉が開く」

意味あったんだ……。

螢一はメダルをはめようとして。

「あ……ひとつ質問いいですか？」

「なんだい？」

「なんでハッキングなんですか？あなたならそのままここに入れる  
でしょう」

「あまり答えたくはないんだが。万が一にでも会いたくないから。

いや、会ってはいけないから」

「会ってはいけないって、誰と？」

「決まってるじゃないか。大魔界長ヒルドとだよ」

「え!？」

「門をくぐれなかった者は引き裂かれ二度と会うことはない。だが  
ヒルドは己に強力な「呪」を掛すことで、一度だけ私に会いに来た

んだ」

「強力な「呪」って……？」

ベルダンディーがはっとした。何かに気がついたようだ。

「ヒルドは自分の命と引き換えにして理ことわりに楔を打ち込んだんです」

「それってつまり……」

「もしお父様とヒルドが出会ってしまった場合、ヒルドの命は失われます」

「そこまでして」

「ええ。でも、だからこそ姉さんが生まれたんです——半身半魔である姉さんが神属であるというのは「証」を残したかったのかもしれません。愛したという証を」

証……。腕に巻いているコスモノートに思わず触れた。

ティールはため息をついた。

「止めることができたら良かったんだが、当然のごとくすでに「呪」は完成していた。しかもヒルドのやつ来るなり」

私、天界に移籍したから。

「あー、ヒルドならあり得る」

「そうだろう？ まあそんなことが簡単にできないことは分かっていたのだが。あの時は魔術を使われてな。きっと心に隙があったのだろう。そうであつたら良いのになど心のどこかで願う気持ちが。故に私はヒルドとは会えぬ」

それはティールの本心からの気持ちだった。

「そしておまえたちに、こんな思いはして欲しくなかったんだ」

「お父さま、ありがとう。そして私たちは大丈夫です。それはお父さまや湖の女神さん、お母さまやウルドとスクルド。何より螢一さんが私にくれたもののおかげです。——それは、愛と勇気」

「いいね……。愛と勇気」

螢一は帰還の門にメダルを嵌めた。  
機械的な豪音をあげて門は開いた。

「お父さま、またお会いしましょう」

「いやいや、嫁に行く娘のセリフはそれじゃないだろう」  
「え？」

少し考え込んだ後。

「お父さま、お世話になりました」

ふかぶかとお辞儀をするベルダンディー。

「私、幸せになります」

最高の笑顔。

「そうそう、それぞれ」

門をくぐろうとする螢一を呼び止めた。

「まだ何か？」

「君は神の力を拒絶したが、いつか神の力を欲して私に会いに来ることになるだろう」

「ははは、そんなまさか」

二人の背中を見送るティールと湖の女神。

行っちゃいましたねえ。

「そうだな」

森里螢一か、娘が惚れるのも……。

泣いているんですか？

「泣いてないっ！私はもう帰るっ！」

二人は無事に裁きの門を通り抜けた。

「ただいま」

スクルドの出迎えに続いてヒルドが。

「おかえり、螢一くん。まさか本当にクリアしちゃうなんて……

あの人に会ったのね。元気だった？」

「ええ、とっても」

ベルダンディーの答えにヒルドは満面の笑みで。

「そう、よかった」

こんな顔もするんだ。神属や魔属、人間も人を思う気持ちは変わらないんだな。螢一は思った。

「さて」アンザスはひとつ手を打つと。

「幕引きとしましょうか。復元！」

裁きの門は一本の杖へと変形した。

「異種族恋愛査問管アンザスがここに裁定する。一級神二種非限定女神ベルダンディーの誓いと覚悟と愛を認ずる」

「はい」

「地上人、森里螢一の誓いと覚悟と愛をここに認ずる」

「はい」

「兩名の未来に光りあれ！！」

ウルドがスクルドがヒルドが「おめでどう」と祝辞を述べた。

アンザスは続ける。

「これは私からのささやかなプレゼント——第九種紫法級礼装、着装承認」

声とともにベルダンディーの衣装が変わっていく。

豪華で華麗なウェディングドレスに。

第九種紫法級礼装とは高位の神属だけが婚礼に使う特別な衣装だった。

感嘆の声を上げる螢一にも羽織り袴が着装された。

「やぁね、ウェディングドレスと合わせるならティルコートに決まってるじゃない」

ウルドの声とともにその上からティルコートが着装され。

「あらあ？私は袴とか言うのをつけるって聞いたわよ」



さらに上から袴が着装された。

「ちょんまげ！！ちょんまげ！！つけよう！」 「いや鼻眼鏡があつ  
いよ！」

盛り上がる親子に。

「螢一さんで遊ぶのはやめていただけですか」

ベルダンディーの言葉にヒルドとウルドは固まった。

本気で怒っている。静かな口調の中に激烈な怒りを込めている。

「まあまあ、ベルダンディー。めでたい席なんだから……」

妹の冷たい目にそれ以上は言葉を告げられないウルドだった。

アンザスは内心で（ああああ、あの娘ったら相変わらずなこと）  
などと思っていたが、娘に「お母さま」と呼ばれて背筋が伸びた。

「はい！」

「螢一さんには白のタキシードを」

彼の衣服は再構成され、白いタキシードになった。

ここでベルダンディーは笑顔を取り戻した。

「すごくお似合いです」

「そ、そうかな」

照れて笑う螢一には満面の笑顔が送られた。

「はいっ！ とっても！」

「あくのく」

ハガルが初めて口を挟んだ。

「時間はいいのかな？」

時間！

慌ててコスモノートを見る螢一。

「うわあ、あと十八分しかない！！」

「え？来る時、何分ぐらいかかったっけ？」

ウルドの問いに。

「確か二十五分くらい……って、間に合わない!!!」

大丈夫ですよ、とベルダンディーが上空を指をさす。

「あ」

『ヒルドさま、この者たちは危険です。一刻も早く私が地上まで排出したいと存じます』

「ふうん、いいけど間に合うの？」

『確信を持って申し上げましょう。今の私であれば充分間に合うでしょう』

スクルドの手によって四人乗りに改造された、グリュージェンデスヘルツがそこにいた。

「お姉さま」

「なあに、スクルド」

「これを」

差し出した手の平には小さな白い卵。グリュージェンデスヘルツを改造する時に見つけて保管していたのだ。

「まあ、ホーリーベル!!! ありがとう」

スクルドは喜ぶ姉に照れくさそうに頬をかいた。

地上界。

ペイオースは法術をリンドは斧術で魔属を掃討していた。

初めのうちは「倒してもきりがない」ほど湧いて出て来たが、ある時間からぱったりと増えなくなり、やがて魔属の影はなくなった。

「あらかた片付いたようだな」

「そのようですね」

リンドもペイオースも息ひとつ乱していないのはさすが、一級神とワルキューレだ。

だが、街は戦闘の影響でひどく傷ついていた。

「すいぶんと荒らされましたわね」

「そうだな」

直さなくちゃいけませんわね。と「修復法術」を使い始めるペイオース。壊れた壁が路面が家が巻き戻し映像のように元に戻っている。

どれ、私も。と同じく法術を使おうとするリンドに顔を引きつらせた。

なにを隠そうリンドは「修復法術」が苦手なのだ。他力本願寺の母屋、森里屋敷を修復した時、歪いびつに歪んで修復された。ウルドが一度壊してベルダンディーとペイオースが「修復法術」をかけても、元の森里屋敷に戻ることはなかった。

魔界への門を指差して焦るペイオース。

「あなたはやらなくていいから！！そろそろみんな帰って来る頃なのであれを見張っていただけるかしら！」

リンドは素直に体育座りをして見守りだした。

素直なところだけは助かりますわー

「ペイオース」

「なんですの。お手伝いは——」

「気のせいかな、どうにも私にはあれが閉じかけているように見えるんだが」

確かに穴の直径が狭くなっている。

「……そろそろ時間ということですかね」

「間に合わないかもしれないな」

魔界への門を開けておく最大開放時間は六時間。ヒルドは「保険」と言っていたが。制限時間が間近に迫っているのだ。

二人の女神は門の破壊を試みたが何度やっても「自己修復」してしまう。

「やっぱりこれ、閉じちゃったら、消えちゃいますよね」

「下手をすると出てくる彼らたちに当たってしまう」

門の中から唸るような音が聞こえた。

「まずい!!」

「あ!! 出てくるんですの!!」

「どうしたらあの再生を止められるんだ」

壊しても直されてしまう。なんとか直せないように。壊しても…  
…直せない。

ペイオースはなにか閃いたようだ。

「よろしいですこと？私が今からこれをぶっ壊しますので、あなたはそれを直して下さい」

リンドは思わず聞き返した。

「え?…直していいのか？」

「ええ、全力でお願いします」

「そうかぁ、直していいのかぁ」

「いきますわよ!!」

ペイオースの腕にバラのつるが絡み、手の平に大輪のバラの花が咲いた。

「ショットガン・ローズ!!」

真紅の閃光が閉じかけていた門を破壊した。

「さあ!! 直してくださいな!!」

リンドは「修復法術」を発動させた。繰り返すがリンドは「修復法術」が苦手なのだ。

門は捻れて変形した形で修復された。

「…:…すまん、また失敗したようだ」

申し訳なさそうなリンドに、ペイオースは自信ありそうな笑顔で答えた。

「いえ、それでいいのです」

歪んで変形した形では門は閉じるに閉じられない。

「ほほほ、一度修復しているから自己修復できないでしょう。名付アンリペアエラーリペアけて直せずの失敗修理。ぐだぐだに変形したその姿で、易々と閉じられるものですか!!」

直後、門の中から螢一たち一行がグリューエンデスヘルツに乗って、凄まじい速度で飛び出した。

彼らの短くて長い魔界への旅は幕を閉じた。

勢いで遙かに夜空を舞うグリューエンデスヘルツ。

上空を見つめるペイオースは安堵と感慨を込めて言った。

「おかえりなさい」

墜落して白煙をあげるグリューエンデスヘルツ。完全に壊れてしまっている。間に合わせるために無茶をしたからだ。

螢一に寄り添うベルダンディー。

疲れている彼に少し心配そうだ。

「大丈夫ですか？」

「あ、うん。しかしよく無事に出られたなあ」

「みんなの力です」

三女神に螢一、ペイオースにリンド。誰ひとりかけてもこのミッションは成功しなかった。

ペイオースがそんな二人に。

「ご無事で何よりです。ベルダンディー……って、あらあら、まあまあまあ」

驚きの表情のペイオースとリンド。

「それって、第九種紫法級礼装じゃあ、ありませんこと？」

ペイオースはしきりに感心している。

「試練を乗り越えたんですね」

「あ、ああ……なんとか」

答える螢一に、ペイオースは呆れ顔だ。

「通れる人がいるとは思いませんでした」

「いや、私は螢一くんならできるだろうと思っていたよ」

「そうですわね、これだけバカ正直な方、そうそういっらっしやい  
ませんものね」

螢一は意を唱えた。

「違う、そうじゃないよ。ベルダンディーと二人だから乗り越えら  
れたんだ」

「確かに……試練は人と女神双方のためのもの、って、いきなり惚  
気けないでくださいます!？」

真っ赤になるペイオースに「別に惚気けたわけじゃ」と螢一。

「して、結婚式はあげたんですの？」

「いえ、それはまだです。神属が足りていなかったの」

「ああ、そうでしたわね。たしか式には女神四名と二人の証人を必  
要とします」

こうして、ウルド、スクルド、ペイオース、リンドの四名の女神  
と、魔属のヒルドとマラー（実は気絶していて、ヒルドの魔力で  
強制的に立たされている）を証人として人と女神の結婚式が執り行  
われた。

かくて物語は冒頭に戻る。

黄金の法術陣の上で中央の二人を囲み集う女神たち。証人の魔属。

「光ふりそそぎ風そよぐ 緑たなびき彩り豊かな空に進む道」

「道は遠く 時に底深き谷 雨の降る朝も 雷鳴吠ゆる夜も共にゆ  
こう」

「癒やしの木々もその道標となり 木の葉が誘う 見つめるは高き  
風 強き花」

「進め歩め 決して止まらぬその旅路 昂のままに 熱き言の葉のままに」

「すべては花散る時まで すべては異なる時まで」

「花と鳥と風と月と ここに集え ここに歌え 祝いの意志がある者よ」

「結ばれし愛と絆に」

「祝福を」

二人の上空で祝いの花火が広がった。それは絶え間のない流星のごとく。

「螢一さん」

「え？」

「実はあの初めて会った時の言葉」

「ああ、あれか」

「それって女神へのプロポーズの言葉だったんですよ」

「え……ええっ!!」

「だから螢一さん、もう一回改めて聞きたいです」

微笑む女神。

「うん」

螢一は二人にとってのはじまりの言葉を、今では誓いとなる言葉を口にした。

「君のような女神にずっとそばにいて欲しい」

これでめでたしめでたしね、と視線を合わせる、ウルドとヒルド。

ヒルドは自分の顎に手を当てて。

「でも、なんか物足りないのよねえ」

「あたしも足りない気がする」

同調するウルド。

「あっ、そうだ!!」

「そうよ!!!」

互いに指を差し合う。

「結婚式の新郎新婦といえは」

「誓いのキスよね」

ええっ!!!

真っ赤になる螢一。

ベルダンディーが困惑した表情で。

「あの……私たち「誓いのキス」は既にすませているんですが」

ウルドは頬を人差し指で搔いた。

「まったく、あんたってば。硬いというのか融通がきかないっていうか」

「？」

「……言ってみれば「余興」と表現すればいいかしら。魔界でのおふざけは怒られたけど、人前とはいえ螢一とキスできるんだし、これは流石に拒否しないわよねえ……ねえ」

顔を覗き込んでくる姉にベルダンディーは真っ赤になって。

「ですが精神の物質化現象が……」

「なあに？それ？」

ヒルドが解説を入れた。

「ベルちゃんの状態が形となって空間に物質を造り出すのよ、魔界では見事に大量の花が咲いたわ。大丈夫、後始末はあの時同様、私がやってあげるから」

「そういうことなら、おもいっきりぱーっと行ってしましましょうか!!!」

ペイオースがノツてきた。

真っ赤になって見つめ合う螢一とベルダンディー。

から少し離れてマラーが渋い顔をしている。



「あのく、ヒルドさま」

「なあに？マーちゃん」

「わたくしはもう退席してよろしいでしょうか？」

「ああ、そっかあ」

マーラーは「めでたい物アレルギー」なのである。結婚式の途中で目を覚ましたが、非常に苦しい思いをした。彼女にとってこの場に留まるのは、アレルゲンの中に浸かっているようなものだ。

「いいけど、退席したら後でお仕置きね」

囓うヒルドにマーラーの背筋が凍った。

お仕置き。彼女は仕方なく場に留まった。

それ、キス、キス。と囁し立てる一同。驚いたことにリンドまで仲間に入っている。唯一スクルドだけは背中を向けて膨れ面をしているが。

「あーでも、スクルドが反対してそうだし」

螢一の最後の抵抗も。

「わかったわよお！！」

振り向いたスクルドの顔は真っ赤である。

「結婚しちゃたんだし、お姉さまと螢一がなにをどうしようと、もう口を挟まないわよっ！」

「う……」

ベルダンディーとキスをするのは問題ない。むしろしたい。人前でなければ。

「あの……螢一さん」

「はい？」

「私がかまいませんよ」

やれやれだ。螢一は覚悟を決めた。

「え……っと、じゃあ」

「はい」

互いの顔は真っ赤で、心臓がいまにも飛び出しそうなほど高鳴っている。

向き合ったまま視線をそらす二人。

「あの……ちょっと」

「そうだね、落ち着こうか」

背中を合わせて大きく息をついた。

やがて決心がついたのか二人は向き合う

ベルダンディーは愛しい人の腕の中に身を預けた。

螢一さん

ベルダンディー

重なる唇

同時に黄金の法術陣の上に広がる無数の花

美しい まるで名匠の手掛けた一枚の絵画のごとく

この時、女神の中で何かが芽生えた。

「これは……」

「ああ、凄いな」

やがて二人は唇をはなした。だが、額と額をくっつけたまま抱きあっている。

ペイオースは微妙な顔をしている。

「私、なんだか胸焼けがしそうですわ」

「奇遇だな、私もだ」

「あたしも——」

リンドとウルドが同意した。

「はいはい、それじゃ」

ヒルドの声に我にかえった螢一とベルダンディーは慌てて身体を離した。

まるで吸引力の落ちない掃除機のように一気にヒルドの手の平に吸い込まれていく花たち。

「いや……しかしいいものを見せてもらったな」

「私、記録を取りました」

と、リンドとペイオース。見れば二人の手のひらの上に、先程のキスをする二人の立体映像が浮かんでいる。

「えー!! あの」

焦るベルダンディーにペイオースは「してやったり」とした顔で。

「もちろん、お二人にもお渡ししますわ。記念にしてくださいませ」  
ベルダンディーの前にも同じ像が浮かんだ。怒っていいのか喜んでいいのかと複雑な気分だった。

「これで、ミッシュンオールコンプリートね」

童女のようにヒルドは笑った。

「螢一さん」

「え？」

「着替えましょう」

いつまでも第九種紫法級礼装とタキシードではいられない。

ベルダンディーは自分の衣装を「女神服」をモデルにした青と白のワンピースに、螢一の衣装をデニムのツナギに変化させた。

こうして女神と人は日常へと帰る――はずだった。

他力本願寺の前に降り立つ一行。

「ちょっと大変なことになっているわね」

「大変で、なにがですか？ヒルドさま」

マラーの問いにヒルドは「変形して閉じなくなった魔界への門」

を指差した。

「閉じなくしたのってだあれ？」

「私が立案して」

「私が「修復法術」を使った」

ペイオースとリンドが挙手をした。

「え？」

「知らなかったのか？ベルダンディー。私は「修復法術」が苦手なのだ」

「では、私たちのお家が歪んで再生されるのも」

「私のせいだ」

ベルダンディーは呆気にとられてしまった。「なんとかしてくれ」と信頼していたが、このような形でなんとかするとは思っても見なかった。

長いため息をつくヒルド。

「私が保険として六時間に限り魔界の門を開いたのはねえ、七時間以上開け放しておくとしてもまずいことになるからよ」

「まずいことってなんでしようか…？」

困惑するベルダンディー。

「時に忘れ去られし虚空の扉、これより湧き出し終末の闇、アボカリプス全てを呑み込み総てを滅ぼさん」

キョトンとする一同。

「ねえ、ウルド。終末の闇ってなあに？」

スクルドの問いに自分も初めて聞いたと。

ヒルドは改めて一同に向き直り。

「終末の闇。そうね、どう表現したらいいかしら。実態のない影、霧かな。質量反応が無いから物理的な手段でシャットアウトすることが出来ない上に、電子機器も破壊、人間程度なら包まれただけで

瞬時に絶命するわ」

闇に触れたあらゆる生きとし生けるものは、瞬時に生命活動を停止する、凍ったりしないが、その遺骸はまるで液体窒素につけたかのごとく、少し触れただけで、粉々に砕け散ってしまうのだ。

「法術とか魔術で封じ込めることはできないのか？」

リンドの問いに無理ねと答えた。

「法術も魔術もあくまで自然の法則に理を上書きして実行されるもの。でも、終末の闇は自然の法則から逸脱した存在。ゆえに封じ込めることはできないのよ」

このままでは地上界が滅ぶ。

N E X T → C h a p t e r 0 0 2 覚醒

天上界。ティールの私室。

今の彼は背が高く、金髪碧眼の美青年の姿をしていた。備え付けられたソファに座って物憂げだ。

妻であるアンザスが、ちょっと心配そうに声をかけた。

「どうしたのですか？あなた」

「ん……ああ、いや、娘を送り出す父親がこんなにも寂しいものか  
と  
思  
っ  
て  
な  
」

「そうですわね」

でも、とアンザスは続けた。

「螢一くんなら必ずあの娘を幸せにするでしょう」

「ああ、信頼しているよ」

「あと、娘はまだ二人いることを忘れないでくださいな」

ああ、そっかぁ、と頭を抱え込むティール。

「私たちの母親、父親としての役目はまだ終わっておりません」

「そうだったな」

「それに……」

アンザスは来ている衣服を脱ぎ捨てた。

「もう一人ぐらい、欲しくありませんか？」

ティールの横に全裸で座り、しなだれかかる。

「君から誘うなんて珍しいな」

「お嫌ですか？」

「とんでもない。大歓迎さ」

地上界ではとんでもない騒ぎになっていることなど、つゆとも知らずに睦み合い始める二柱の神であった。

「終末の闇」そうね、どう表現したらいいかしら。実態のない闇、霧かな。質量反応が無いから物理的な手段でシャットアウトするところが出来ない上に、電子機器も破壊、人間程度なら包まれただけで瞬時に絶命するわ」

闇に触れたあらゆる生きとし生けるものは、瞬時に生命活動を停止する、凍ったりしないが、その遺骸はまるで液体窒素につけたかのごとく、少し触れただけで、粉々に砕け散ってしまうのだ。

リンドが先程とはまるで違った鉄面皮で問う。

「法術とか魔術で封じ込めることはできないのか？」

「法術も魔術もあくまで自然の法則に理を上書きして実行されるもの。でも、終末の闇は自然の法則から逸脱した存在。ゆえに封じ込めることはできないのよ」

このままでは地上界が滅ぶ。

「本当なのか。魔属は平気で嘘をつく、なればこそその魔属だ」

続けるリンドに。

「さあ……どうかしらね。私は嘘を言っているのかもしれない。もしかしたらなにもしなくても、閉じなくなった門は消えてなくなるかもしれない。——なんてね、これは紛れもなく事実よ」

「いま、ユグドラシル（天上界中央管理システム）のメモリーを探りましたけど、終末の闇にあたいする記録はどこにも存在しませんでしたわ」

ペイオースの言葉にヒルドは唇の端をつりあげた。

「そうでしょうねえ。天上界ではティールとアンザス、魔界では私と側近のふたりぐらいしか知らないことだもの」

「あんだ、側近がいたんだ!？」

「ウルドちゃん、なに驚いているの? いくら私でも、広大な魔界

全土を一人で支配できないわよ」

魔属としてはハガルたちに劣るが、「統治する」ことについては遥かに凌ぐ。つまるところ今回の「大魔界長の失職騒動」はあくまでもハガルたちの独断専行だったのだ。

「あ……」

螢一は突然声をあげたベルダンディーに。

「どうしたの？」

「私、思い出しました。幼い頃、お父さまが同じ事をおっしゃてました。当時は「おとぎ話」としか捉えていませんでしたが」

ユグドラシルのメモリーではなく自分の記憶にあったと。

ユグドラシルは女神たちの管理をしているが、あくまで表層の一部であって女神個々の記憶や感情までは管理していない。

「ベルダンディーが言うなら」

「お姉さまの言葉なら」

「間違いありませんわね」

続けて頷くウルド。どうやら女神たちの認識は共通のものになったようだ。

「なーんか、腑に落ちないわねえ」ヒルドは苦笑する。

それにしても、とウルドは考えた。

「質量反応が無い。物理的な手段でシャットアウトすることが出来ない。電子機器も破壊、人間程度なら包まれただけで瞬時に絶命。

ええ……と、あっ！ガタノゾーアだわ」

「いきなりなんですの？」

ペイオースの質問に。

「怪獣よ、怪獣。ウルトラマンティガのラスボス怪獣。それがね、

「シャドウミスト」って闇を吐くのよ。「シャドウミスト」の特徴そのままだわ。でね、世界が闇に覆われちゃってティガは……」



特撮オタクのウルドであった。

ああーはいはい。

「その続きはあれが片付いたらたっぷり聞きますわ」

閉じなくなった魔界への門Ⅱ今は空間に空いた「次元の穴」を指差した。

マラーが「私たちも手を貸したほうが」と進言するも。

「だめよ。これは女神の、神属の落ち度。大昔に契約を結んだのよ。これもその契約の内」

死んだ魚のような目でヒルドは答えた。次に笑顔になって。

「心配ないわよ、螢くんがいるんだもの」

「は……あ。そのようなもののですか？」

「そ・う・よ」

の後ろで、ものすごく落ち込んでいるリンドである。

「私がつとちゃんと「修復法術」を使えていたら」

「リンドがいたからこそ私たちは無事に地上界に戻れたんです」

と、ベルダンディー。

「ですから自分を攻める必要なんてありません。今はあの門を閉じることが優先しましょう。——ヒルド」

「なあに、ベルちゃん」

「終末の闇が発生するまでの正確な時間を教えて下さい」

「えーっ、ヒルドちゃんわかんない」

とおどけてみせるも、ベルダンディーの瞳をみて。

「冗談よ、あと十分ね」

怒らせた時の迫力は魔界で味わっているはずなのに、懲りないというのか、むしろヒルドは面白がってる？

時間は十分にある。

リンドの戦斧が舞い。

「とにかく壊して、壊して」

ペイオースが法術を掛ける。

「復元するだけですわ!!!」

しかしは何度やっても魔界への門だったもの。 「次元の穴」は歪んだ形で再生されてしまう。

ベルダンディーやウルドが再生に加わっても歪んだままだ。既に二十回を越えているがもとに戻らない。

「こんなにやっているのにどうして……?」

困惑する女神たち。その後ろでただ状況を見ることだけしか出来ない者が二名。

「お姉さま、がんばって……」

スクルドの表情にも悲壮感が漂いはじめた。

一方、螢一は思考の海にいた。

直しても直しても元に戻る。直しても元の形戻らない。元の形……

…元の形……あ!!! そうか!!!

名前を呼ばれて振り返ったベルダンディーは、螢一がスクルドに見えないように、妹を指差しているのに気がついた。

え?

スクルド? 壊す、直す、元の形。

螢一がサムズアップしている。

……あ!!!

柔らかな微笑みを女神は彼に贈った。

以心伝心。これだけで通じ合う二人。なんとも羨ましい限りである。

ベルダンディーは離れて立っているスクルドを呼び寄せた。

スクルドと同じ目線の高さまで身をかがめ。

「今からあなたに真実を伝えます」

「え、しん……？」

「はい。真実です。私の名前において嘘偽りではありません」  
ウルドが慌てたように二人の間に入ったが。

「姉さんの気持ちはわかります。ですがスクルドももう真実を知っている頃でしょう。これはこの娘自身のためでもあるのですよ」

ベルダンディーの迫力に押されてしまう。

数瞬、考えを巡らせていたウルドだがやがて。

「いつまでも足踏みをさせてはいられないか……わかったわ」

二人の姉の会話にスクルドはついていけない。今から告げられることが真実であることだけは理解したけれど。

「いいですか？よく聞いてください。あなたは法術を使えないんじゃない。使えていたのよ」

ベルダンディーの言葉に思考が止まる。

「あなたの法術は詠唱を必要としない常時発動型。魔界でばんぺいくんを組み上げたのはあなたの法術の力なのよ」

続けてウルドがさらに衝撃的なことをつげる。

「法術を使えない？とんでもない。あんたはそう思い込んでいただけ。だから「機械」を造ることに逃げた。「機械」に頼ってしまった。「機械」に頼るがゆえに、法術が限定されてた。あんたは自分を信じていなかった。信じる力こそが法術の根源なのよ」

スクルドの思考がぐるぐると回る。

機械……法術……機械……え？法術。

巡り巡る思考の中で湧き上がってきたのは憤りだ。

「どうして誰も教えてくれなかったの！？ どうして誰も道を示してくれなかったの！！」

螢一が告げた。

「それはね、みんながスクルドのことを好きだからだよ。君の紋章

は未来。未来という光の種を大切に育てたかったからなんだ」

ペイオースの両腕が後ろから抱き込んだ。

「あなたはまだ幼い樹のようなもの。幼いがゆえに強風が吹けば折れて曲がってしまうこともある。だからこそですわ。だからこそみんなは黙っていたのです。やがてあなたが大樹となって立派な花を咲かせるように」

そう、歪んで育てば取り返しのつかない事になりますわ。大天界長ティールと女神集合体代表取締役アンザスの娘であるがゆえに。

ペイオースは胸の内をつげることなく、小さな女神を優しく抱き続けた。

「えーと、暑苦しいから離してくれない？」

「あ、はい」

ペイオースが身体を離すとスクルドは髪をかきあげて。

ジト目がちに螢一を睨んだ。

「で、今、私に打ち明けたってことは、あれに関係することなんですよ」

「次元の穴」を指差した。

「成功するか賭けみたいなものなんだけど、君の力が必要なんだ」「私？」

螢一は頷いた。

「あの穴が修復しても元に戻らないのは。あの形が元の形として記憶されたからなんだと思う」

ベルダンディーはなんだか誇らしげだ。

虚を突かれたような、ウルド、ペイオース、リンド、そしてマール。

ヒルドはクスクスと含み笑い。

（ネタさえ判ってしまえば、誰がやっても同じなんだけどねえ。こ

の際だからスクルドちゃんを成長させようってことね)

小さい女神は少し混乱している。

「チョット待って、ちょっと待って、ちょーっとまって……えーと、あの歪んだ形が元の形になった、……のね？」

「だから今度は「修復」ではなく「正しい門の形に変形」させなくちゃいけないんだ」

「え……でも、私の神力じゃ、とてもそんなことは出来ないわよ」

「うん、スクルド一人じゃ出来ない。ここにいる女神全員が力をあわせないとね」

原因さえ判明すれば、「正しい門の形に変形」にするだけならば、一級神一人でも出来る。

彼の言葉に意を唱えようとしたリンドは、ベルダンディーが唇に人差し指をあてていることに気がついて、思いとどまった。

ウルドが言ったではないか。「いつまでも足踏みをさせてはもらえない」と。

なるほど、そうか。

螢一は続ける。

「ウルドとリンドとペイオースが君に神力を注ぎ込む、その上でベルダンディーが神力の流れを制御するんだ。これはスクルドに最も近いベルダンディーにしか出来ないことだと思う。問題は——」

「私なら大丈夫ですよ。地上界に出ると同時にユグドラシルへのリンクも復活しましたから」

ベルダンディーはこんな風にと「戦衣」に着替えて見せた。

魔界で消耗した神力も地上界に出ることで元に戻ったようだ。

「後は、あなた次第ですよ」

後はスクルドが法術を使うのだが。

小さい女神は叫んでしまった。

「できない、出来ない、出来っこないわよ!!!」

「あんたねえ、そんなんだからいつまでたっても……!!!」

ベルダンディーは喰って掛かりそうな姉を片手で制すると。

「私は信じていますよ。あなたなら出来るって。あなたを信賴する私が信じられませんか？」

「お姉さまを信じる……」

スクルドは遠い目で遙か天空見ていた。

信じる……。

信じること。

お姉さまが信じてくれている。だったら。

やがて瞳に覚悟が灯る。

「ノーブル・スカレット!!!」

背中に可愛らしい天使が現れた。

「どうせやるしかないのでしょうか？だったら、さっさとあれを片付けるわ!!!」

「次元の穴」に右腕を伸ばし手の平を開く、左手は右手首に。

「螢一さん、カウントダウンをお願いします」

ベルダンディーに頷く螢一。

「3……2……1……ゼロ!!!」

声とともにスクルドの中に膨大な神力の奔流が流れ込んだ。

ベルダンディーが神力の奔流を一点に絞り込む。

スクルドは激流に押し流されまいと必死で抵抗しながら、「正しい門の形に変形」することを願う。

変われ、変われ、変われ、変われ、変われ、変われ、変われ、変われ、変われ、  
わかれ、かああああわああああえ——!!!

スクルドはその時、自分の中でずれていた歯車がガツチリと噛み合うような「感覚」を味わった。

見事に「次元の穴」は魔界への門に戻り、消え去った。

賞賛と喜びの声をあげる女神たちと螢一。

「あんたにしてはよくやったわね」

と、ウルドに頭を撫でられるも、スクルドは呆然としていた。

「これが……本当の法術」

湧き上がる本当の神力。女神の力。

私ははじめから間違っていたの？

違う、違うわ。ばんぺいくんができた時、友だちができたみたいで嬉しかった。シーグルを組み上げる時、妹が出来るワクワクした。私は回り道なんてしてない。無駄なんかじゃない。私の辿る道は、すべてが私の糧になる。

底意地悪そうにヒルドが覗き込む。

「あらあ、もっと誇っていいのよう。あなたは世界を救ったんだから」

「そうね、でも、女神なら当然の事だわ」

一点の曇りもない最高の笑顔。

「なーんだ、つまんない。マーちゃん帰るわよ」

さっさと転移するヒルドを「待って下さい」と呼んでマーラーも後に続いた。

事件も片付いたし天上界へのゲートも無事に再開通した。

「では、螢一くん、ベルダンディー。しばしのお別れだ」

「今度は休暇で訪れますわ」

握手を交わす螢一とリンド。ペイオースとベルダンディー。

！！

突然、ベルダンディーは夜空の一点を見上げた。

虹色の法術陣が浮かんでいた。直下に光の通路を描きながら。光は一同のすぐ前の路上を照らしている。

「天界から誰か降りてきます」

「なんだか今日は慌ただしいわねえ」

ジト目で呟くウルド。

「そんな、まさか。この波動は……」

驚くベルダンディーの呟きが終わらないうちに、二人の女神が地上に降り立った。

一人は背の高さがスクルドと同じぐらいで金髪のお団子頭で短いツインテール。「音の調律」プログラムで騒ぎを起こした、システム管理神、クロノである。彼女は管理神の制服を着ている。

もう一人は、螢一の初めて見る女神だった。

背の高さはベルダンディーとスクルドの中間ぐらいだ。漆黒の黒髪が真っ白い肌に印象的である。髪は眉毛のところで綺麗に切りそろえられ、紋章はよくわからない。癖のない真っ直ぐな髪は胸元まで伸びてこれも綺麗に切りそろえていた。衣装は白衣に赤袴、巫女のような衣装だが、要所要所に神属特有の文様が細い白金色で刻まれている。うりざね顔の端正な顔立ち。もっとも印象的なのはその眼だろう。黒目がちな黒曜石を思わせる蠱惑的な瞳がこちらを見ていた。

薄紅色の小さな唇から言葉が発せられた。

「一級神二種非限定、兼お助け女神事務所代表取締役、メイプル降臨」

メイプルの後ろに控えるクロノも挨拶をした。

「……あなたがどうして」

驚く女神たちを前にして、胸に手を当て優雅に一礼をする。

「まずはベルダンディーさん、森里螢一さん。ご結婚おめでとうご



「ございます」

挨拶をされたことで、ベルダンディーは驚きの表情をやっと崩した。

「あ、はい。ありがとうございます」

続いて螢一も礼を述べる。

「ペイオースさんにリンドさん。ウルドさんにスクルドさんも息災なようでなによりです」

「お助け女神事務所代表取締役のあなたがどうして地上界にいらしたの？」

疑問を呈するペイオースに螢一が聞いた。

「え？彼女が降りてくるのって珍しいの？」

「そうですね……今の状況を地上界の会社に例えるなら、大会社の社長、部長クラスの人が外回りの営業に直接出る——みたいなものですよ」

「は……あ」

言われても大学五年生で会社務めの経験のない彼は、いまいちピンと来なかった。

ともかく。とベルダンディーが質問する。

「なにか緊急事態でも起こったのですか？」

「うーん、そうよねえ……螢一さんもいることですし、初歩の初歩から説明しましょうか。時間がかかりますがよろしいですか？」

クロノが余計な口を挟んだ。

「ほんとは地上界のお菓子が目的なんです。以前、ここに降りてきて帰る時に頂いた、お菓子の詰め合わせを食べたときから、メイプルさまはすっ！！」

メイプルの裏拳がクロノを吹き飛ばした。勢いでコンクリートの塀にクロノは激突し、塀は覆いかぶさるように崩れた。

(いまはコンクリートの塀なんて殆ど見かけないよね)

何事もなかったかのように崩れた塀の残骸から立ち上がるクロノ。流石はワルキューレ候補生である。

「もう……メイプルさまは相変わらずです」

「余計なことと言わないでよろしいですわ——場所を移しましょう」  
他力本願寺の山門を指差した。

寺の境内に入る一同。

無残に変形した「森里屋敷」の姿に、視線を交わすベルダンディ  
ー、ウルド、ペイオース、リンド。

螢一は呆れ顔である。

「そうだった。忘れてた」

大丈夫、私に任せて。とスクルドが名乗り出た。

「今度は私一人でやってみる」

「ほほう、大きく出たわねえ。あんた一人で本当になんとかなるの？」  
挑発するウルドに「そうね」とだけ答える。

いつもなら壮大な口喧嘩から実行使にうつるはずなのだが。

スクルドは両腕を広げ大きく深呼吸をすると、背中の天使に呼びかけた。

「いっくわよお、ノーブル・スカイレット!!!」

両腕を「森里屋敷」に向けて突き出す。

法術が奔流のごとく溢れ出した。黒髪が風に煽られたように乱れる。

「歪んだ森里屋敷」が舞い上がりながら分解し、残骸は地上に降りて再構築した。もとの「森里屋敷」に。

「ありがとう、大好きよ」

天使に微笑みを贈った。

天使はスクルドの頬に己が頬を寄せると、背中から消えた。

静寂を破ったのはメイプルの拍手だった。

「凄いわ、スクルドさん。神力をあげたわね」

「ありがとうございます」

でも、ちょっと疲れた。と、その場にへたり込んでしまった。

そんなスクルドの前に、ウルドが背中を向けてしゃがみこんだ。

「？」

「なにしてるの？はやくお家に入るわよ」

「え……うん」

一同は「みんなのティールーム」に入ったのだが、流石に、螢一、ベルダンディー、ウルド、スクルド、ペイオース、リンド、メイプル、クロノの人数が入ると八畳間では手狭に感じる。室内にはちゃぶ台やテレビ、水屋タンスなど家具も置かれているのだ。ちゃぶ台を挟んで螢一、ベルダンディーの二人とメイプル、少し後ろに下がってクロノ。螢一から見て右手にはスクルド。左手にはリンド。狭いのでウルドとペイオースは、それぞれスクルドとリンドの斜め上の空中に浮かんでいる。

完全に帰るタイミングを外してしまった。と、心のなかで呟く、ペイオースとリンド。

ベルダンディーたち三女神は戦衣から普段着に着替えていた。

「さて、私が地上界に降りてきた理由を話す前に……って、この家はお客さんが来たのにお茶菓子の一つも出さないのですか？」

とんとん、と指先でちゃぶ台の表面を叩く。

「え？そ、そうですね」

ベルダンディーが腰を上げて台所にある冷蔵庫からカップアイスを持ってきた。

ああ、それあたしの、と抗議の声をあげるスクルドに、螢一がまた後で買ってきてあげるからとなだめる。

カップアイスを堪能して。

「ん——、やっぱり地上界のお菓子は美味しいですわね！」

ご満悦である。

「さて、それじゃ、帰りましょうかしら」

「あなたなにしにここに来たの!？」

怒鳴るウルドに、右手の人差指を上に向けて胸の前で振る。

「冗談よ、冗談です」

こほん、とひとつ咳払い。

「まずは螢一さん、あなたに天上界がどのような形で運営されているかを知ってもらわなければなりません」

「はあ……」

螢一の生返事。

「一番上に大天会長ティールさんが存在します。主神とも言いますね。次に女神集合体代表取締役アンザスさん。その下に大法院、さらにその下に戦闘部隊のワルクューレと各種行政機関が存在します」

「行政とか立法とか、って大法院でなんですか？」

「平たく言えば政の中核ですね。日本で言えばティールさんとアンザスさんは天皇、皇后と言った立場でしょうか。私たち「お助け女神事務所」とライバルの「アースお助けセンター」はアンザスさんの直轄になります」

メイプルはここで一拍置く。

「ここまではよろしいですか？」

「はい」

「では、続けます。「お助け女神事務所」、女神の仕事には大きく分けて三つが存在します」

メイプルは顔の前で右手の人差指を立てた。

「一つ目は地上界の監視です。困っている人がいないか、幸と不幸

のバランスが崩れている人がいないか、女神は監視しています」

さらに中指を立てられた。

「二つ目は地上界への女神の派遣です。幸と不幸のバランスが崩れている人の望みを女神は一つだけ叶えます」

薬指を立てられた。

「三つ目はユグドラシルの管理、調整です」

「いっちなつまんない仕事よねえ」

「あら、ウルドさん。仮にも神属のあなたがそれをおっしゃいます？」

ユグドラシルは高次元生命体である神属が地上界に顕現するにおいてとても大事な役目を担っている。自然の精霊や妖精、はては自然そのものの力を変換して「女神の肉体」を構成しているのだ。

「もともとは私たちも三次元の存在でした。長い長い時間と努力で肉体を捨て、高次元生命体に至ることが出来ました。ですが、そこで問題が発生したのです。肉体がない。これは私たちにとって大きなストレスとなりました。矛盾していますよね。望んで肉体を捨ててなお、肉体を求めるなんて。そこで私たちはユグドラシルを作り上げました。高次元生命体でも肉体を得られるように……」

「どうやって作ったかは割愛しよう。本編とは関わりが薄いからだ。これがユグドラシルの存在する理由です。おっと、話がそれましたね」

メイプルは薄く微笑んだ。

「ところで螢一さん、女神はどうやって救済する人の選別をしていると思いますか？」

「どうやって、て……幸と不幸のバランスが崩れている人ですか？」

「それは基本中の基本です」

「それ以外にあるの？」

スクルドの問い。

「いくらバランスが崩れていても、「世界の破滅」を望むような方の元には女神は降りません。また、天上界は女神と人の交わりを厳しく制限しています。故に「女神と交わりたい」と望む方にも女神は降臨しません」

メイプルはため息をついた。

「これは本当なら告げてはならないことなのですが、契約者の願いは予めユグドラシルが予測演算しています。契約者がどんな人柄でどのような趣味嗜好でどのように育ったのか。判断基準は多岐にわたります。ですが私たちは派遣する女神に「どんな願いであるか」を告げたりはしません。これは女神の心理的抵抗を少なくするためです。人の願いを叶える……正面から見ればとても素晴らしいことのように見えます。ですが、裏から見ればそれは人間の欲望に直接触れるものです。幸せを与える女神が与えたことで不幸になるとしたら、それって矛盾しているでしょう？故にごく一部の神属は女神の仕事を軽蔑されています。ですが私たち女神は人間の願いを叶え続けます。なぜだかお解りですね、ベルダンディーさん」

「願いを叶えた方の笑顔が素敵だから、でしょうか」  
メイプルは頷いた。

「人の願いを叶えることで女神も幸せになること。人と女神が一緒に幸せになること。これが「女神の救済システム」の本質です」

「私、はじめて伺いましたわ。ですがなぜ今その話をしたんですの？」  
ペイオースは驚いていた。

「ですから、はじめに告げてはならないことと言ったはずですが——それにしても、蜚一さんの「お願い」はユグドラシルの予測演算から完全に外れていました」

「え！？……そう、なんですか？」

「はい、あの時は慌てましたわ」

ウルドが口を挟んだ。

「つまり、螢一のお願いは「内角低めのぎりぎりストレート」だった、ってこと？」

「そこ、茶化さないように。ですからやむを得ず螢一さんの欲望を制御したのです。後で調べたのですが、予測が外れたのは前例がありませんでした」

ふう、とため息を一つ。螢一に向けたものだったのか、それともこれから話す内容にか。

「さて、ここからがペイオースさんの質問の答え、私が地上界に降りてきた理由、本題です」

黒曜石の瞳がベルダンディーを真っ直ぐ見つめた。

「あなたは女神の仕事を今後どうなさるおつもりですか？」

「え？……あ！！」

螢一はここではじめてベルダンディーが「仕事」として地上界に降りてきているのに気がついた。

ベルダンディーもメイプルを真っ直ぐに見つめている。

「私は螢一さんを幸せにするために地上界に降りてきました。あなたは言いましたね。人と女神が一緒に幸せになることが「女神の救済システム」の本質だと。ですから、これも私の仕事です」

「それは詭弁です。あなたは地上界にすることを「仕事」とは思っていないでしょう。仕事でないなら私は今すぐにもあなたの地上勤務を解いて天上界に連れ戻します」

「……！！」

「仕事とってないことを続けさせるほど、うちの事務所は甘くはありませんよ」

鋭い言葉にベルダンディーは混乱した。いや、進退窮まった。

私は仕事としてここにいる。それは本当。でも、私の螢一さんに

対する気持ちも嘘じゃない、本当のこと。私は……どうしたら。どうしよう、どうしたらいいの？ このままでは私は天上界に連れ戻される。

「そこでひとつ、私から提案です。ベルダンディーさん、あなたは「女神の仕事」を休職なさい」

「え、いいのですか？」

「いいもなにも、これしかないでしょう。……本当はこんな回りくどいやりかたをしたくはなかったのですが、女神事務所という形をなしている以上、どうしても本人からの申請が必要なのです。それにあなた、ご自分のお母さまの役職をお忘れですか？」

クロノが口を挟む。

「女神集合体代表取締役ですよね」

あ、そうか。といった表情をする一同。

ベルダンディーは笑顔で。

「はい！ では、一級神二種非限定女神ベルダンディー、お助け女神事務所に休職を申請しますっ！」

「お助け女神事務所代表取締役メイプル、申請を受理します」

一拍開けて、やれやれ、と言った感じで首筋に手を当てるメイプル。

「ですが事務所のエースが抜けるのはいささか寂しいものですね……と、スクルドさん」

「え！？ わ、私？」

「あなたですよ、一級神になるつもりはありませんか？」

私が一級神？ と今度はスクルドが混乱していた。

続けるメイプル。

「そうですねえ、私の見立てではこのまま真面目に真剣に修行を続けたなら、五年後ぐらいには昇給試験を受けられるようになります」



スクルドはしばらく考え込んでいた。  
やがて。

「わかった。やってみる。一級神になるわ」

「本気なのね」

声をかけてきたウルドを見上げて。

「だから、私に修行をつけて」

「おやまあ、明日は槍でも降るんじゃないのかしら」

「真剣に言ってるんだからふざけないでよ」

「ごめん、ごめん、とウルド。」

「だけどうして私なのよ」

「ペイオースやリンドはいつまでも地上界にいるわけじゃないし、新婚のお姉さま二人の邪魔をするほど無粋じゃないわ。言ったでしょう「お姉さまと螢一がなにをどうしよう」と、もう口を挟まない」  
「だから消去法でウルドしかないのよ。お願いできるのは」  
「消去法って、まいいわ。私は厳しいわよついてこられる？」

「望むところよ」

不敵に笑い合う二人。

ベルダンディーがその間に口を挟んだ。

「一級神になるということ、大きな力を得るということは、その力に値した義務と責任も負うことになります。あなたにはその覚悟がありますか？」

「正直に言ってしまうと「大きな力」だとか「義務」とか「覚悟」だとかまだ私にはわからないの。でもこれでだけははっきりしているの。「お姉さまのような素敵な一級神になる」これがずっと前からの私の目標だったの」

「ですが、一級神になってしまえば天上界での業務が待っています。仙太郎くんとは会えなくなりますよ」

「ねえ、お姉さま。……私、今回の二人を見ていて気付いたことがあったの。解ったことがあったの」

「解ったこと、ですか？」

「<sup>えに</sup>縁」とは結ばれるものではなく自らが結ぶもの、だって。だから私が天上界に戻っても仙太郎くんとはまたきつと逢えるわ」

私と仙太郎の仲を裂きたいのなら反陽子爆弾でも持ってきなさい、と胸を張った。

ウルドは胸の中で呟いた。

だけどこのまま交際を続けていたら、やがてこの娘と仙太郎くんは「裁きの門」を通らなければなくなるわね。この二人にそこまでの覚悟があるのかしら、——でもそれは、もっとずっと先の話よね。私はこの娘がりっぱな一級神になるまで教え導くだけだわ。

「よし、明日から修行をつけてあげるわ、だけど今日のところは……」

顎の先に人差し指をあてた。

「螢一の誕生会ね！！」

びしいっ、とばかりに指をさす。

「披露宴もいたしましょうか」

ノッてきたペイオースにウルドは難色を示す。

「それは……螢一のお父さんとかお母さんの都合もあるし、今日のところは「誕生会」だけにするしかないわね」

「しかし、この場所ではいささか狭いな」

小首をかしげるリンド。に対して。

「本堂なら広いわよ」

とスクールド。

なら決まりね。とハイタッチするペイオースとウルド。

しかし今の季節、人間の螢一にとっては「本堂は寒い」のだ。

「ならば結界を張りましょう」

「飾り付けは私たちが」

「後は料理ね、ベルダンディー、お願いできるわね」

「はい、もちろん」

メイプルが手を上げた。

「私も手伝いましょうか」

「え、いいのですか？」

「いいものにも、本来ならもっと人数は少ないはずではなかったのかしら」

「ええ、ちいさなお誕生会を開くつもりでした」

「いきなり八人に増えてしまって、さすがのあなたでもお手伝いが必要でしょう。私は材料の生産と下ごしらえ、ベルダンディーさんはそこから先の「お料理」でいいかしら」

「はい！ 助かります」

いまさらっと凄いことを言わなかったかメイプルは。材料の生産、一級神ならありなのか？

ベルダンディーも作り出せるだろう、しないのは一日に使える神力の総量が限られているためだ。

ちなみに、女神たちも食事は出来る。基本的にはユグドラシルから活動源を得ているが、人間のように食事から活動源をえる事もできる。食べれば排泄となるのだが、女神たちは人間よりはるかに優れた消化器官を持っているため、回数と量もずっと少ない。

森里屋敷の炊事場。

「にしても、あなたはよくこのような前時代的な設備で食事を作っておりますね」

煮炊きは薪、ちいさな冷蔵庫と極めつけは、手押しで組み上げ式のポンプ。食器戸棚なども古ぼけていて小さい。

ニッコリとベルダンディー。

「かまどで炊くごはんって美味しいんですよ」

「認めますが、最新式の炊飯器も負けてはいませんよ。包丁を見せていただけますか？」

メイプルは三徳包丁を受け取ると。

「よく磨き込まれていますね。螢一さんへの愛を感じます」

ベルダンディーは何やら考え込んでいるメイプルに不審そうな顔をしている。

やがてメイプルは。

「わかりました。これは私からのプレゼントです」

天に掲げた右手の平から閃光と共に法術が解き放たれた。

光が晴れると炊事場は「キッチン」に様変わりしていた。明るい照明が照らし出す銀色のシンク。水道はお湯と水が混じりあって出てくる形に。電子レンジと以前よりも大きくなった冷蔵庫。炊飯器。ガスコンロの上にはレンジフード。シンクの下には収納のスペースがいっぱいで、まぎれて食器乾燥機などもある。古ぼけていた食器戸棚も以前より大きくなっていった。なにからなにまで新品だった。

「まあ……これは」

「素晴らしいでしょう。地上界の時間で最新式のものばかりですよ」  
誇らしげなメイプルに、ベルダンディーは困ったような微笑みをむけた。

「これでは私が何が何処にあるかわかりません。あと、このお家は和尚さんから借り受けているものですよ」

「場所は今から二人で料理しますからすぐに覚えられますでしょう。それとこの屋敷を和尚さんに返却することは起こり得ないと断言します」

「……！！ なぜですか？」

「時が来ればわかります、ではお料理をはじめましょうか」

重力遮断フィールドで空中に浮かせた大きなトレイの上に、誕生日ケーキとその他様々な料理が並べてあった。

「完成しました。ありがとうございます、メイプルさま」

「で、キッチンの使い心地はどうですか？」

「このキッチンなら螢一さんに、以前よりももっと美味しくごはんが作れます」

「気に入っていただけただけで何よりです」

「では、本堂に運びましょう」

お食事が出来ましたよ。

本堂の扉を開いたベルダンディーは、驚きの声をあげた。

正面の扉以外は紅白の垂れ幕がかかり、床には巨大な欧風の絨毯が敷き詰められていた。天上からはシャンデリアが下がっていて、内部をこれでもかぐらいに明るく照らしていた。丈は低いが大きな座卓と、周りを囲んでコの字を描くように座布団。極めつけは寺の本尊が鼻眼鏡をかけていることだ。

さらに、リンドがペイオースと瓜二つの衣装を身にまとっている。

「地上界に降りる途中でペイオースと話をしたのだ。戻ってきたら私がペイオースの衣装を身に着けようとね。——それで、どうだろうか？ 螢一くん」

「いや、それはその」

ペイオースほどに胸は大きくないが、腰もしっかりくびれていて、ヒップラインもキレイで足も長い。

「悪くはないと思うけど、やっぱりリンドにはいつもの白い戦衣が似合うと思うよ」

「そうか。君がそう言うのなら、そうなのだろうな」

地上界こうちの服を着た姿もみたいな。と頭の隅で考える螢一だった。

一升瓶を片手にウルドが歓迎の声をあげる。

「待ってたわよ、ベルダンディー」

「それじゃあ、螢一さんのお誕生会をはじめましょうかと、ペイオース。」

かくしてにぎやかに執り行われる「誕生会」

料理やケーキもなくなり、楽しい時間はあっという間だ。

本堂の内装をもとに戻して境内に揃う一同。

「では、こんどこそ私たちは天上界に戻る」

「ごきげんよう、そして、お幸せにですわ」

ペイオースとリンドは天上界に戻っていった。

私たちは帰らないんですか？とメイプルに質問をするクロノ。

「まだまだ、地上界の甘味を味わい尽くしていませんもの」

「まだ食べるんですか？ですが私たちこっちのお金は持っていないませんよ」

「そうそう、ですからあ」

ウルドに視線を向けて。

「ウルドさんが出してくださいいな」

「なんで私が」

「あああ、知ってますよ。土地や株式相場に手を出してかなり預金額を増やしていること。たしか現在は三億八千万ぐらいでしたか」

「姉さんどうしてそんなにお金を」

ベルダンディーの問にメイプルが答える。

「援助するつもりなんでしょ。もし将来、妹夫妻がお金に困った時に——恩を感じてるのよウルドさんは、自分が世界の終末の引き金にならなかったことにね」

「——！！ なっ、余計なことを！」

真っ赤になるウルドの顔。

「恩だなんて俺たちは……」

「もちろんウルドさんも百も承知のことよ、螢一さん。そのうえでいざとなったら力になりたいって気持ち、妹を持ってる貴方にもわかるでしょ……それにしてもウルドさん、あなたのやっていることは黒に近いグレーゾーンですねえ。事務所としては株式に手を出せないよう手配することも出来るのですが、どうしますか」

ウルドは渋々と言った感じで何処からか財布を取り出すと。

「ほら！三万円！！これだけあれば充分でしょ！」

押し付けられるように渡された紙幣に、メイプルはにっこりとして礼を述べた。

浮き上がるメイプル。

「では、いきますよ。クロノ」

「この時間だとファミレスかコンビニぐらいしか……って、待って下さいよお！」

慌ててメイプルに追い付き、先程から思っていた疑問を口にした。

「本当にベルダンディーの地上界勤務を解くつもりだったんですか？」

「まさか！！」

コロコロと笑った。

「天上界の最高位である二人の意思を覆すなんて、出来るわけないでしょう——ちょっとした悪戯みたいなものです。……そんなことより食べますよ。大福、あんころ餅、フルーツパフェにみたらし団子……」

「女神の仕事」を休職したことにより天上界でも魔界でも、ベルダンディーからの「幸運の値」はカウントされなくなった。

メイプルの本当の狙いはこれだったのだ。

森里螢一、あれだけの数の女神に愛されて。まったく不思議な男だねえ。

N  
E  
X  
T  
→  
C  
h  
a  
p  
t  
e  
r  
0  
0  
2  
母  
親



ベルダンディーは、「WHIRL WIND」に出勤する前に洗濯物だけは片付けておきたかった。最後の洗濯物を物干しに下げると軽く息をついた。

瞳には少しだけ憂いの色がある。

「相談するなら姉さんよね、でもちょっと恥ずかしい」

ほんのりと頬を染め、独り言を呟くと、やがて決心したのか大きく深呼吸をした。

今からでは時間的に無理ですから仕事が終わってからにしましょう。

「WHIRL WIND」はベルダンディーと螢一がバイトしているバイクショップだ。

ところで店主の藤見千尋には、二人が結婚したことを速攻で見破られてしまった。さすが女の勘。披露宴とかはどうするのと聞かれて、螢一が苦し紛れに「なかなかいい場所がなくて」とごまかした。空になった洗濯かごを手に森里屋敷、母屋に近づくと、ふわっと空気が変わる。

母屋は経年劣化で若干が隙間風あった。これはウルドが薬品を造るにおいて、そしてスクルドが精密作業をするにおいて、邪魔となつた。

そこでスクルドは特殊なシールドを発生させる装置「空間シールドくん三号」を作り出した。住人や品物などが出入りするのには問題ないが、空気の流れと温度を調整する。(空気がまったく流れ込まないなら中にいる者は窒息してしまう)これにより、森里屋敷の中は冬は暖かく夏は涼しくなった。また、屋敷全体の劣化を抑える

のにも役に立っている。

「W H I R L W I N D」から戻ってきて、夜の帳がすっかり降りた頃。

螢一はG I グランプリのブルーレイにかかりっきりで、しばらく自室から出てこないだろう。

ウルドはスクルドの部屋で妹に法術の修行をつけているはずだ。

「スクルド研究所」とプレートに掛かった障子の前に立つ。

「姉さん入りますよ」

姉妹でも礼儀ありだ。

なかからウルドの声が聞こえる。

「ほらあ、また神気が乱れてる。そんなんじゃ目標の三十分には遠いわよ——あ、いいわよ入って」

障子を開けて「スクルド研究所」に入る。左手、西側中央隅に大きな座卓。道具入れが置かれていることから、作業台だろう。隅にアームが取り付いてあってモニターが固定されていた。作業台の南側には小さな本棚があって、少女漫画雑誌から量子学の本までいろいろな本が背表紙を見せていた。

八畳間の中央でスクルドは空中に浮かんで座禅を組んでいた。額に汗を浮かべている。

「あの、姉さん。少し相談したいことがあるんです」

「あらあら、あんたが私に？ 珍しいことがあるものね」

ベルダンディーは頬を染めながら、しかし真剣な口調で。

「出来れば二人っきりでお話がしたいのですが」

「スクルドにはあまり聞かせたくない話、ね」

ウルドは顎に手を当てて数秒思索していたが。

「よし、今日の修行はおしまい」

の声とともにスクルドは畳の上に落ちた。

「もう、疲れたあ……」

「一級神になるんでしょ、まだまだ、音を上げるのには早いわよ」  
「わかってる、わかってるてば。それより、そっちの相談が終わったら、私からも二人に相談があるんだけどいいかな？」

え！？ といった感じのベルダンディーとウルド。

「いいわよ、じゃあ、ベルダンディーからね……え、と。私の部屋にいきましょうか」

場所を「ウルドさまの城」と書かれたプレート奥の四畳半に移して。右側には大きな薬品棚とその前に実験用機器。左側は壁一面たくさんの本が詰まった本棚。正面にはベッド。以外にもベッドは綺麗に整えられている。床にはカーペットが敷かれている。

「気かれたくない話ね」

ウルドは右手を天に掲げた。

「じゃあ、まずは索サーチ・コクーン 敵 法 術」

法術の波が走破する。

「半径百メートル以内に敵意の反応はなし、と」

次は私ごとベルダンディー。両腕を頭の上で交差させ、一気に外側に振り下ろす。

「音響結界サイレンス・フィールド」

ベルダンディーを中心に光の粒子が広がって、部屋全体を包み込む。

これで部屋の中の音は結界に阻まれ外に漏れることはなくなった。同時に外からの音も部屋には伝わらないのだが、物理的に遮断されているわけではないし、万一何かあったとしても外にはスクルドがいるので大丈夫だろう。

結界に対して障壁という防御手段もあるのだが、二つの違いについては後に語ることにしよう。

ウルドは何処からか座布団を取り出すと、妹に勧め、自分も座布団の上にあぐらを掻いて座り込んだ。

ベルダンディーはきちんと正座である。

「それで、私に相談てなあに？」

「実は……」

ベルダンディーの頬がますます赤くなる。

次の言葉を口に出していいのか迷っている様子。頬が染まっっている。

「あ、あの、私。その……えっと」

「なんなのよ、はっきり言いなさいよ」

急かすウルドに、なおも俯いて身体をもじもじとさせている。

「言ってくれなきゃ、わからないわよ、相談てなに？」

やがてベルダンディーは意を決したのか、俯いたまま。

「実は、結婚式でキスをしたときから、時折胸の奥がきゅんって甘く締まるんです。ごく偶にですが、腰の奥底が熱くなる感じがあったり……」

顔を上げてウルドを真っ直ぐに見つめると。

「なので、あの、私、こんな感覚初めてで……どうしたらいいのか判らなくて……」

「は……えっ？」

それはつまり「螢一に発情」しているわけで。

「あんたって男を知らないのよね。性的な意味で。ユグドラシルと直結してるんだから少しは調べればいいのに」

「え——？ なにを調べるんですか？」

こ、この娘は、まったく。ボケとかじゃなくて真剣に純粹にこれなんだから。

「SEXよ！地上界の男女の性交のこと！——いい、あんまり深く

調べたらだめよ。こんなことは実体験じゃないと伝わらないんだから」

検索したのか、ベルダンディーの頬がさらに赤くなった。驚きと困惑と戸惑いが混ざっている。

ウルドは呆れた声で。

「少しは理解できたかしら」

普段は常人並だが、女神の本来の思考速度はスーパーコンピューター以上である。

理解した上で。もじもじと身体を揺すっている。

「——でも、でも、私、はじめて処女で、やっぱり怖いというか、うまく出来るか不安で。あとは、処女だからこそはじめての夜は螢一さんから誘って欲しい……と思います」

最後の方は再び俯いて消え入りそうな小さな声になってしまっていた。

あまりの相談内容にウルドは唾然としていた。

ベルダンディーは真っ赤になった顔を上げた。

「ですので、あらためて姉さんに相談したのいんです。どうしたら処女を螢一さんに捧げることができでしょうか」

「あ——ね……」

しばらくしてようやく質問の内容を理解したらしく、ウルドは片手で後頭を掻いている。

「つまり螢一に女神としてだけではなく女性としても愛して欲しいのね。心が重なれば身体も重ねたくなる。特別なことじゃない自然なことだわ」

ユグドラシルで検索すればそれこそ無数の数の事例が出てくるのに。

「螢一は」

ウルドは胸の前で腕を組むと。

「あの調子だとまず間違いないく童貞よね」

「え？……ええ、多分」

ウルドは少し考えて。

「難しいわね。神属にとって処女喪失はイニシエーション大事な通過儀式。問題はそこを螢一が何処まで理解してくれるか、よね」

「大事な通過儀式ってなんですか？」

「あんたってばこんなことも知らないわけ？」

「以前の私は女神の仕事が楽しくて気が回りませんでした。事務所でもそうした会話は皆無でしたので」

「——はぁ」

天然すぎるのも考えものね。まあ、それがこの娘のいいところでもあるんだけど。

「愛し愛されて初めてを迎えた後、神属はもう一段階上の存在に昇華するのよ」

「レベルアップみたいなものですか？」

「うーん。ちょっと違うわね……どう表現すればいいのかしら。脱皮、羽化のほうに近いかな」

今の段階でも一級神のエースと名の高いベルダンディーである。

これで「羽化」したらどのような存在になるのだろう。

「だから「捧げる」とか「失う」とかの表現は適切じゃないのよ。ともかく、はじめに言えるのは「焦らない」ことね。これはいつ何処でエッチをするのかと同時に、行為の最中でも言えること。あな  
たの焦りが螢一にも伝わってうまくいなくなる、なんてことは充分考えられるわ」

それから、と続ける。

「初体験に失敗してその後の関係が気まぜくなる、ってのは二人に

なら問題ないわね。慌てることはないわ。今回が駄目でも次があるくらいの気持ちでエッチすること。ついでにいつ求められても大丈夫なように、身体のケアはしっかりしておくこと。最後にこれが最も厄介な部分なんだけど、「女性のエッチは心で、男のエッチは身体で感じちゃう」ってことかしら」

「心と身体ですか……」

理解が追いつかない様子。

「うーん、私も経験ないからあまり偉そうなことは言えないんだけどさ……男のエッチには「射精」とした明確なゴールがあるんだけど、女のエッチにはゴールって存在しないの。好きな人と身体も心も重ね合う。その上で得られる快感は至上のものらしいわよ」

神属の女性は処女が多い。男女比の差もあるが、最大の問題はこの大事な通過儀式にある。まあ、中には例外も存在するかもしれないが。

漫画や小説などで表現されている、女性がイクのというのは男性視点が多いのだ。

「齟齬があることは理解しました。ですがどうやって間を埋めるのですか」

ウルドはため息をついた。

「これが難しいところなんだけどさ。人それぞれで何十年も連れ添った夫婦でも誤解したままだったり、一、二回のエッチで溝が埋まるカップルも存在するわけ。——そうねえ、私から助言してあげられることがあるとしたら、二人で正直な気持ちをよく話しあうことかな。言葉にして出さなければ伝わらないことって多いのよ。大丈夫、裁きの門をクリアした二人だもの自信を持ちなさい」

「わかりました。螢一さんとよく話しあってみます」

ベルダンディーは薄く微笑んだ。

ウルドはちょっと考えて。

「でもさ」

「まだ何か？」

「螢一ってばどうしてエッチまで求めて来ないのかしらね。手を握るとかキスぐらいはしてるんでしょ？」

「え、はい。——それは……私にもわかりません」

ベルダンディーは、ハツとしたような顔をした。

「もしかしたら螢一さんは女神の私を好きであって、女性としては見てくれないとか」

「ないわー。ウルドの眼がジト目になる。」

「あいつはエロ本とかも持っているし、あの性格であんたを女性として見てないって考えづらいわよ」

魔界で口づけした後、飛び退いてたし。

ともかく、と一拍開けて。

「まあ、そのあたりもよく話し合ってみなさい」

これでベルダンディーの相談はおしまいである。

結界を解除して「スクルド研究所」にうつる二人。

スクルドは何をしていたか。驚くことに右手の人差指一本で逆立ちをしていたのである。重力が反転したかのごとく服も髪もまっすぐ天に伸びている。

ウルドは微笑みを零すと。

「自主練ってわけね、関心関心」

「あ、ウルド。お姉さま」

くるりと半回転し両足を畳の上につけて立つ。

「とにかく、立ち話もなんだし、入って、座って」

促されるままに八畳間に入る二人。

対面する三姉妹。



「私たちに相談とはなんですか？」

ベルダンディーの言葉にスクルドは、がばっと音がしそうな勢いで土下座した。

「私、仙太郎くんと一緒に学校に通いたい。お姉さま、保護者になって！ ウルドはお金とか支援をお願い！」

数瞬の空白の間があって。ベルダンディー。

「保護者になることは問題ありません。好きな人と少しでも長く居たい気持ちはわかります。ですが一級神への修行を怠ってはだめですよ」

「つまるところ、学校に通いながら修行が出来ればいいわけよね」  
しばし考え込むウルド。

やがてなにか閃いたのか、おもむろに法術を唱え始めた。

——それは鎖、あるいは重き鎧、封じ込める枷。二級神管理限定ウルドの名において、炎の大精霊に申し上げる。いましめの腕輪よ、いまここに……あれ！——

キン！！

かん高い金属音、畳の上に腕輪が一本現れた。

「学校に通うとなればそれ相応のお金は必要ね、確かに。お金は出してあげる。交換条件としてあんたはこの腕輪を付けて登校しなさい」

「これって、何？」

「まずは着けてみなさい」

ちよっとデザインがやぼったいわね。などとスクルドは呟きながら腕輪を身に着けた。

途端に、ずしん、と心を縛られるような感覚があった。

「なに……？これ？」

「その状態で法術を使ってご覧なさい」

言われたのでまずは初歩の初歩、空間収納を使おうとしたのだが。  
「使えない、どうなってるの？」

「当然よ、あんたの頼りない神力をさらに制限してるんだから」

「なんでこんなものを……」

「まあ、続きを聞きなさいって。それはね、着けたままにするだけで神力の制御と増幅の訓練になるものよ」

「えーっ!？」

ベルダンディーは胸の前で両手の平をあわせた。

「なるほど、これなら学校に通いながら修行ができますね」

流石は姉さんと微笑んで褒められ、ウルドは得意げに。

「ウルトラマンゼロのテクターギア・ゼロからヒントを貰ったのよ」

「……? ねえ、ウルトラマンゼロって誰？」

ウルドはスクルドの質問に喰って掛かりそうな勢いで。

「あんたね、知らないの!？ ウルトラマンの時代を繋いだ偉大な勇者のことを！ はじめて姿を現したのは「大怪獣バトル ウルト  
ラ銀河伝説 THE MOVIE」よ。邪悪なベリアルの猛威にピ  
ンチに陥ったウルトラ兄弟を助けるためにK76星から颯爽と駆け  
つけるの。その時のセリフが「俺はゼロ、ウルトラマンゼロ、セブ  
ンの息子だ!」って——」

「わかった、わかったから。ウルドが特撮大好きなのは」

少々辟易気味に遮ろうとするスクルドだが。

「大体ね、ゼロが生まれなかったら今の円谷があるかどうか……」  
「なおも続けようとするウルドに今度はベルダンディーからストッ  
プが入った。」

「姉さん、そのあたりにしましょうか」

眼が笑っていないのが怖い。

「——わかったわよ」

渋々とウルドは矛を収めた。

「ですが姉さん、学校にアクセサリーを着けて登校してもいいのでしょうか？」

「ああ、人間の目には見えないから大丈夫よ」  
なるほど、ならば問題ないだろう。

次の日の早朝。明日は定休日です仕事はない。

森里恵が「相棒」のはカワサキKSR—IIと共に他力本願寺を訪れてきた。革のレディースジャンパーの上から鞆を斜めにかけている。

森里屋敷はこの時代になぜかインターホンがないので、玄関先で声を張り上げた。

「おはようございます！ けいちゃん、いるー？」

奥から、ぱたぱたとスリッパの音がして、応対に現れたのはベルダンディーだ。

「おはようございます。恵さん。螢一さんですか？ 呼んできますね」

奥に去っていくベルダンディー。

（あいかかわらず綺麗よねえ、あれ？でも、何かいつもと違うような……？）

間をおいて、廊下の奥から螢一が出てきた。

「おはよう、恵。こんな朝早くからなんだい？」  
起き抜けなのかパジャマのままだ。

（あれ？螢ちゃんもなんかいつもと……）

「どうした、ぼけっとして」

「あ、ああ。借りていた本を返しに来たのよ」  
鞆の中から一冊の書籍版を取り出した。

「長い間借りっぱなしでごめんね」

「いやいや、恵なら本を痛めるようなことはしないからさ」

「題名と巻数を確認する。」

「うん、確かに」

「でもさ、この「転生したらスライムだった件」もいよいよ最終章に入ったわよね」

「んーでも、この巻は最終章のプロローグって感じだけだな」

「驚いたのはあいつの真の名前が「魔導王朝」と同じだったってこと」

「それは俺も思った。これからもまだまだ波乱が……って、おまえなんでこんな朝早くに？」

「もちろん、ベルダンディーのご飯を食べるためよ」

「……おまえなあ」

「だって美味しいんだもの。いいじゃない、材料費は出してるんだし」

「螢一は片手をこめかみにあてた。」

「ちゃんと自炊はしてるのか？」「男の心をつかむには胃袋からって知らないか？」

「やあーねえ。私を誰とってるの？」「桂馬さんと鷹乃さんの娘よ」

「うーん……」

「一言で納得してしまう自分がなんとなく悔しい。」

「ベルダンディーは笑顔で。」

「では、螢一さん。ご飯の準備をしますね」

「あれ？ さっきみたいにあなたって呼んでくれないんだ」

「確かに私は螢一さんの妻になりましたけど、その……やっぱり、人前であなたって呼ぶのは……ちょっと恥ずかしくて」

「あー、確かに。俺も人前でベルって呼ぶのは照れる……な」

頬を染めあう二人。

なんですと！！ 恵は驚愕している。

「ベルダンディー、い、今、なんて!？」

「ちょっと恥ずかしいですか？」

「じゃなくて！ ベルダンディーと螢ちゃんって結婚したの!？」

「はい。結婚式もあげました」

螢一の腕を抱きしめて女神は微笑んだ。

恵は「幸せオーラ」を吹き零す二人に、呆れていいやら祝っていいやらと逡巡したが、やがて気を取り直すと。

「おめでとう、二人共」

「ありがとうございます、恵さん」

「不出来な兄ですが末永くよろしくおねがいます」

「不出来なんて、螢一さんほど素敵な男性を私は知りません」

はあ、ご馳走様です。とは声に出さずに。

「そっかあ、ベルダンディーがお義姉さんになったのね」

「こちらこそよろしくおねがいます」

ベルダンディーは綺麗なお辞儀をした後、朝食を作りキッチンへ向かった。

「んで、螢ちゃん」

「なんだよ」

「この事は桂馬さんと鷹乃さんに報告してあるの？」

「あ……」

螢一は固まった。

「やっぱりしてないんだ。昔っからそうなのよね、しっかりしているように何処か抜けてる」

はあ、とため息をつく恵。

今更報告もしづらいだろうし。

「わかった、私が一肌脱いであげる。一個貸しだからね、ちゃんと返してよ」

「恐れ入ります」

「で、籍はちゃんと入れたんでしょ」

「え？　せき？」

「なに、すっとぼけてるのよ！　入籍よ結婚したんでしょ！」

食い気味に怒鳴る恵。

「え、ああ、うん、入籍したよ」

と、場をごまかした。

いや、しかし……と螢一は頭の隅で考えていた。

恵は食事を済ませて帰っていった。

この日の夜半。

「みんなのティールーム」で寛ぐ三女神と螢一。

ベルダンディーは螢一の仕事用のツナギのほころびを直している。ウルドはだいぶ前に買い替えたフルHDのTVでブルーレイを鑑賞中だ。（正確にはISOファイルだが）「うーん、いいわね、ウルトラマンゼロのテーマ。どんなに味方側がピンチになっても、これが聞こえるだけで熱く燃えてきちゃうわ」等々、独り言を言っている。スクルドといえばごろりと横になって、少女漫画雑誌を読んでいた。螢一は何かを考え込んでいる。

「ねえ、ウルド」

「なあに？」

ウルドは画面から視線を離さず、スクルドも雑誌を読みながら。

「ウルトラマンゼロってどうして上半身が青で下半身が赤なの？」

「メタ的に言えば他のウルトラマンと差別化するためね。設定的にはお父さんのウルトラセブンがレッド族、お母さんの宇宙科学技術庁の女性科学者がブルー族だからよ」

「そうなんだ」

「なあに？ 特撮に興味出てきたの？」

「別に。聞いてみただけ」

「あ、そう」

先程からなにか悩んでいる様子の螢一に、ベルダンディーが心配そうにどうしたのですか、と聞く。

「いやさ、これは聞いてみるだけなんだけど、女神様って地上界の戸籍とかないよね」

はじめに答えたのはベルダンディーだ。

「持っていますよ」

「持ってるわよ」

「持ってる」

ウルドとスクルドが続く。

「え！？」

ウルドが呆れたように。

「無いといろいろと不便じゃない？ だから、私が時間をさかのぼって十年前に作っておいたわよ」

「えーと」

理解が追いつかない螢一にベルダンディーが。

「私の戸籍上の名前はノルン・ベルダンディー。姓がノルンで名前がベルダンディーです。19XX年生まれの二十三歳。十七歳ではありませんよ。本籍地は千葉県猫実市猫実3-4-106他力本願寺で誕生日が1月1日です。お父さまはイギリス系アメリカ人で19XX年に日本に帰化。お母さまが日本人なのは少し無理があるのですが……」

ウルドが続ける。

「所詮は日本のお役所仕事よ。データさえ揃っていれば誰も疑わ

ないわ。ちなみに私は三月三日生まれの二十五歳」

「あたしは仙太郎くんと同じの十一歳。誕生日も同じで五月三日。まあ、これは偶然だけだね。来週から同じクラスに転入するのよ」ちなみに三女神ともマイナンバーカードを所持している。

同じクラスと続けたスクルドの言葉に螢一の頭はやっと回りだした。

「えっと、じゃあ、婚姻届出せるんだ」

婚姻届の言葉にベルダンディーは真っ赤になって両手で口元を押さえている。

ウルドは微笑むと。

「なるほど。こっちでも正式に夫婦になりたいわけね」

感極まって「螢一さん！」と抱きつくベルダンディー。螢一はちよつと驚いたけど女神を優しく抱きとめた。

「いいんじゃない。明日にでも婚姻届もらってきなさいよ。ああ、今はパソコンからでもダウンロード出来るわね。あ……でも焦る必要ないか」

続けるウルドにスクルドが。

「好きにすれば？ って今月号はこれで終わりなの？ 相変わらず引きが強いわねー」

どうやら姉の婚姻よりも少女漫画の続きが気になる様子。

「提出日は大事な記念日だから慎重に選んでね。九月二十四日は……過ぎちゃったか」

九月二十四日は「ああっ女神さまっ」の連載開始日である。

今は行政のサービスもしっかりしているし、素敵な入籍日になると良いわね。

「あ、でも、証人が必要になるわね。一人は私として、もうひとり……」



「証人は二十歳以上なので私は無理です」  
スクルドはまるで他人事のよう。  
だとすると。

ベルダンディーが続ける。

「後は千尋さんでしょうか」

螢一は嫌そうな顔で。

「怒られそうだなあ……」

「まだ入籍していなかったの、とか」

微笑むベルダンディーにウルドが続けた。

「まあ、二人で相談して決めてね——と、ベルダンディーから大事な話があるんだったわ。私たちは席を外すから、あとはよろしく」  
ウルドは浮き上がった。

「ちょっとウルド！ 痛いってば、痛い！ 無理に襟首掴まないでよ！」

「動くから痛いんでしょ」

騒ぎながら「みんなのティールーム」を出ていく二人。

しばらくの沈黙が流れて。

この間にベルダンディーは常人のなんと数百倍という凄まじい速度で思考していた。

どうしたら螢一さんに私の気持ちを上手く伝えることが出来るでしょうか。どう話したら理解してもらえるでしょうか？

やがてひとつの結論に至ったのか、思考速度を常人のものと同じに戻した。

「け、いいえ、あなた」

「え、はい」

いつにない真剣な表情のベルダンディーに、螢一も少しの緊張感を覚えている。

「あなたは女神としての私を好きになってくださいました。……ですが。その……女性としてはどうなのでしょうか？」

「あ、えっと、その……ベルは女性としても魅力的だよ」

「「真実のキス」をしてから二週間と少したちましたが、その……間に私を一人の女性として抱きたいと思ったことは……ありませんか？」

「えと、それは」

螢一は少し逡巡したが。

「あるよ。何度もある」

これで問題の一つはクリアした。ベルダンディーは少しだけ胸のつかえが取れたのを覚えた。だけど本題はまだこれからである。

さすがに恥ずかしいのか正座している膝の上の両拳が固く握られていた。俯いて顔は耳まで赤い。

「実は私、はじめて処女で、うまく出来るか不安なんです。怖いんです」

「え、処女……って」

顔を上げ、螢一の眼を真っ直ぐに見つめて。

「処女だからこそ、あなたから誘って欲しいのです」

いくら朴念仁でもこれは螢一にも理解できた。

「うん……当然だと思うよ」

ここでまたしばらくの沈黙。

告げたことで精神的負担になってしまわないだろうか。でも隠しておくことなんて出来ない。

「後、これは姉さんから聞いた話なのですが、神属の女性にとって

「はじめての時」はとても重要な意味を持ちます」

「重要な意味？」

「愛し愛されて「はじめて」を終えた後、神属はもう一段階上の存在に昇華できるそうです。姉さんは「羽化」と表現していました」

「なんだ、そんなことか」

「え！？」

「力が強くなってもベルはベルのままなんだろ。だったらなにも問題はないさ」

失敗するとかまるで考えてない様子だ・

やれやれ、この男はまったく。

ベルダンディーは嬉しくて涙が出そうであった。

「では、あなたからの素敵なお誘いを待ってます」

「あ……そのことなんだけどさ」

「はい？」

「確かにベルを抱きたいと思ったことは何度もある。……でも、無理なんだ」

ベルダンディーは螢一の言葉が理解できずに少し混乱した。

「もちろん、神聖な女神を人間の俺が抱いていいのかって部分もあるんだ。でもそれ以上に心の奥底で何かブレーキを掛けるんだ」

螢一は頭を抱えこんだ。

「なぜなんだ、どうしてなんだ。心では「抱きたい」と思っているも身体の欲求があっても、もっと深いところでストップが掛かってしまうんだ」

深い溜息。

螢一はふらりと立ち上がり「ごめん、すこし頭を冷やしてくると言い残して「みんなのティールーム」を出ていった。

呆然と一人部屋の中に取り残されるベルダンディー。

不意に「聞いてたわよ」と声がして。十分の一サイズのウルドが姿を見せた。

「どうやらあいつは女性に対してトラウマがあるみたいだね」

「……ええ、しかも心の奥深いところで」

「困ったわねえ——表層意識ならともかく、かなり深いところまで干渉すると」

「失敗すれば最悪、螢一さんの心が壊れてしまいます」

「かと言ってトラウマの原因がわからなければ対処のしようがないのよね」

どうしたものかと思つめ合う二人であった。

庭からサイドカーのエンジン音がかすかに聞こえた。

「お出かけのようね」

とウルド。ついでに心たりはあるのと聞く。

「ええ。螢一さんが向かうのはおそらく「ポレポレ」です」

猫実市内にある喫茶店だ。

玄関先で電話の鳴る音が聞こえた。

ベルダンディーは落ち着いた足取りで玄関先の電話の受話器を上げる。

「——はい。森里です」

『はい、こんばんは。アンザスよ』

「えっ、お母さま！」

『やっと仕事が一段落したの。だから、明日の昼ぐらいにお邪魔するわよ』

「はい、承りました」

『なによ、親子の間で他人行儀な。明日は「女神集合体代表取締役」とか「異種族恋愛査問管」ではなく母親として降りるから歓迎よろしくね』

「はい！ わかりました。お菓子を沢山用意してお待ちしてますね」

『うんうん。それでよろしい。じゃまた明日♪』

受話器を置くベルダンディーに。

「なあに？ 明日アンザスが降りてくるの？」

「ええ」

「――明日は一波乱ありそうね」

ウルドはジト目で空を睨んだ。

ベルダンディーはクスリと微笑んだ。

「でも、ここに降りてくる女神っていつも突然じゃありませんか」

「連絡があるだけまし……か」

螢一のサイドカーは他力本願寺の前の坂道を下って、街なかに入っていた。

いつも整備を欠かさない愛車は今夜も好調に轍を刻む。

猫実工業大学のキャンパスから北東に少し離れた位置に、喫茶店「ポレポレ」はあった。席はカウンター含めて二十席ほど。繁盛期には猫実工大の客で賑わう。

螢一がサイドカーを駐車場に止めると、ちょうど店主の通称「おやっさん」が看板をしまうところだった。

「悪いね、今日はもう……って、あれ？森里くん」

「こんばんは」

「裕介に用事？」

「はい」

困ったような笑顔の螢一におやっさんは何かを察したのか。

「中で片付けをやっているから入って、入って。店は閉めちゃうから時間とかは気にしなくていいよ」

「お気遣い、感謝します」

螢一はお辞儀をすると店内に入った。

カウンターから声がかかる。

「お、森里くんじゃないか。久しぶりだね」

「ご無沙汰してます。裕介さん」

まあ、座ってと進められるままに裕介の前のカウンター席に腰を

おろした。

五代雄介。猫実工大の先輩にあたる。歳は三十手前ぐらいか。爽やかな笑顔が似合う好青年である。正直、螢一にはこの青年が何を生業として暮らしているのかわからない。今のようにポレポレの手伝いをやっていたかと思えば、三ヶ月や半年ほど行方不明になっていたりする。それでも人柄のせいか、彼を慕ってここに来る生徒も多い。

五代はコーヒーで満たしたカップを置いて。

「で、今夜はなにか悩み事かな？」

「わかりますか」

「その顔を見ればね」

ふう、と螢一のため息。

「何から話していいものやら……」

螢一はぽつりぽつりとベルダンディーの馴れ初めから話し始めた。ところどころつかえつつかえただけけど、ともかくベルダンディーが女神であること、今の二人の状況を伝え終えた。

五代は苦笑を交えつつ。

「なるほどね。ベルダンディーさんが女神様か」

「信じてないでしょう？」

「いや……信じるよ。俺にも色々あったからさ」

エプロンに印刷されているマークを指差す。

「確かにね。思いあたることはあるな。ここにも二人で来てくれたこともあるけど、彼女を文字で表現するなら、清楚、清廉、静謐、聖女かな」

にしても、と五代は続ける。

「森里くんはベルダンディーさんの事を本当に大切に思ってるんだね」

「はい」

「悪いことじゃないさ。むしろ良いことだよ。誰かを真剣に大切に思えるのはとっても素敵なことだからね」

拳を握って親指だけを上に立てる。サムズアップである。

「今回のことは俺も力になれないけれど——そうだね、一つだけ。君の「お願い」を例えにするなら、「君のような女神にずっとそばにいて欲しい」だっけ。森里くんがそばにいて欲しいのは女神なのか君なのかどっちなのってこと。まあ、両方って欲張りな選択肢もあるけどさ。ここはひとつ男らしくどっちかに決めようよ」

「——やっぱり、決めないと駄目ですか」

「両方って選択肢もあるっていったけどね。ようは気持ちの問題」

「気持ちの問題では……」

「だから一人で解決しようと思わないこと。夫婦なんだからさ。「富める時も病める時も」ってやつ」

「道は遠く 時に底深き谷 雨の降る朝も 雷鳴吠ゆる夜も共にゆこう」

「そうそう、それぞれ」

螢一は目の前のコーヒーを飲み干した。冷めきっていたけれど。

「やっぱり裕介さんに相談してよかったです。ありがとうございます。ありがとうございました」

「いやいや、深々とお辞儀されるようなことじゃないよ。ま、とにかくベルダンディーさんとお幸せにね」

再び礼を告げて駐車場に出る螢一。

胸のあたりから軽快な電子音。スマートフォンを取り出すと発信者の名前を見て驚いた。

「げ、桂馬さん」

ともかく出ないわけにはいかないので通話をタップする。

『恵から聞いたぞ』

「あ、えーと」

『いろいろと話したいことがあるんだが、俺は急な仕事でそっちは行けない』

ほっと胸をなでおろす螢一だが、次の一言で凍りついた。

『だから、鷹乃が向かう。明日の昼頃には着けるだろう、覚悟しておけ。ああ、それとな「男ならいくつになっても胸の奥底に大きな絵を掲げておけ」以上だ』

一方的に通話を切られて呆然とする螢一であった。

「大きな絵ってなんだ？」

ともかくいつまでもこうしてはいられないので、愛車に跨り家路についた。

愛車をガレージに着けると、ベルダンディーが飛びかからんばかりの勢いで抱きついてきた。

「螢一さん!!」

「え、わ!？」

「もう、心配したんですよ。こんな時間まで何をしていたのですか」

「こんな時間てまだ、え!？」

腕のコスモノートを確認すると午前零時を過ぎていた。

「は?　なんでこんな時間に……」

ウルドは少々憤りを感じさせる口調で。

「あんなふう飛び出して行ったじゃない?　心配してこの娘、あなたの気を探っていたのよ。そしたらまるまる二時間分気が探れなくなっちゃって、なだめるのに苦労したんだから」

「何処にと言われても……ポレポレで裕介さんに相談をして」

「ほんとにそれだけなの?」

「間違いないよ」



考え込むウルド。

さきにベルダンディーが動いた。

「ごめんなさい、少しだけ螢一さんの記憶を見せてくださいね」

自分の額を螢一の額によせてくっつけた。

ベルダンディーはこうすることで相手の記憶を読み取ることが出来る。ただし、ごく表層の記憶だけなのだが。

「二時間分、きれいに記憶が消されています。あと、この波長は…  
…魔属!? もう一つ、神属の波長もします、でもこの波長は」

「感じたことのない波長よね。だけどベルダンディーの波長にすごく似てる——何があったの?」

「——覚えてませんけど」

そうよね、とウルド。

とにかく無事で良かったです。ベルダンディーは腕にすこし力をいれた。

「ほんとうに、本当に心配したんですよ」

「うん…:ごめん。ありがとう」

ウルドの「とにかく今日はもう寝ましょう」の言葉に、一同、この日は就寝についた。

この「消された二時間」についてもあとで Chapter を立てて語るとしよう。

翌朝。

螢一の部屋。

「あなた、あなた。起きて下さい」

「あ…:ベル。おはよう」

「珍しいですね、こんな時間まで寝ているなんて」

「え、今何時？」

「九時過ぎてますよ」

螢一はどんなに夜遅くまで起きていても七時には眼をさます。これは他力本願寺に居を構えてからの習慣だ。

「ちょっと寝すぎたかな——と」

身体を起こして大きく伸びをする。布団を自分で畳んで押し入れにしまう。

「じゃ、顔を洗ってくる」

「ご飯はもう出来ていますよ」

茶の間のちゃぶ台の上には。「これぞ日本の朝食」といった感じのメニューが並んでいた。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

「ありがとうございます、では片付けますね」

「ちょっと待って」

「え、はい」

螢一はベルダンディーの瞳を真っ直ぐ見つめると。

「昨日は本当にごめん。俺は、一人で抱え込むじゃなくて、きちんとベルに相談すべきだったんだ」

「確かに。私、少し怒っています、だから……お仕置きです」

ベルダンディーは螢一の頬にキスをした。

照れくさそうに笑う螢一。

「あ、あと、今日の昼頃、鷹乃さんが家に来るんだけど」

「私のお母さまも昼頃……！？」

「ちよっ、ちよっと待って。お義母さんのアンザスさんが昼頃降りてきて……」

「お義母さまの鷹乃さんがお昼頃、訪ねていらっしやる……」  
数秒の間。

えええええええつ！！

重なる 吃 驚 の声にウルドが怒鳴り込んできた。

「なによ、うるさいわね！」

「どうしよう、ウルド、アンザスさんが降りてくる！」

「知ってる」

「どうしましろう、姉さん、鷹乃さんがいらっしやいます！」

「あ、今知ったわ」

苦笑するウルドであった。

「まあ、落ち着きなさいよ、二人共。結婚した家の双方の親が顔をあわせるなんてよくあることじゃない」

「あ……」

「はい、そうですね」

「にしても」

ウルドは失笑混じりに。

「あんたが取り乱すの久しぶりに見たわー」

お恥ずかしいです。ベルダンディーは頬を染めている。

「あ、婚姻届の証人の欄、鷹乃さんに埋めてもらったらかしら」

「いいですね、私からもお願いしてみます」

輝くような笑顔を見せるベルダンディー。

しかし、螢一はジト目で。

「あ……、それはどうかな、きっと今頃……」

時間は少し進んで。

1970年型の日産ブルーバードSSSが、猫実市の市街に入ってきた。ドライバーはもちろん、螢一の母親「森里鷹乃」だ。

「まったく、親に黙って結婚なんて二万年早いわ！ これはきっちりダメとかないとね」

他力本願寺へのゆるい坂を登り、流石に境内に直接乗り込む動線

はないので、併設されている駐車場に停めた。キーを抜きドアの鍵を締め、母屋に向かう。玄関先で立ち止まって、ちょっと感慨深げに呟いた。

「ここに来るのも久しぶりね」

何かが上空で光るのを感じた。日光とは違う輝きに思わず視線を向ける。

「え……」

遙かな天空に法術陣が現れていた。まるでスポットライトのように光がそこから玄関前に降り注いだ。光の中を一人の美しい女性が降りてきた。

地面に足をつけると同時に、法術陣も光もきえる。

女性は優雅に一礼をすると、笑顔で。

「はじめまして、私はベルダンディーの母でアンザスと申します。

天上界で女神集合体代表取締役を務めております」

鷹乃さんの第一印象は、なんて優雅できれいな女性だった。

なにか不穏な発言を聞いたのだが、とにかく挨拶を返す。

「こちらこそはじめまして。森里螢一の母の森里鷹乃です」

「まあ、あなたが。どうぞこれからもよろしくおねがいます」

「よろしくおねがいます」

女神と人の母親は握手を交わした。

「お互いなにか事情がありそうですが、ともかく中に入りますよるか」

アンザスの言葉に鷹乃は同意した。

玄関を開けて中にはいると、まずは鷹乃が。

「螢一！ いるかい？ 今着いたよ」

「ベルダンディー、お母さんですよ」

茶の間の障子が開いて二人が姿を見せた。

「いらっしやい、お母さま。鷹乃さん」

「いらっしやい、アンザスさん。鷹乃さん」

笑顔のベルダンディーに対して螢一は緊張している様子。

「あら、ベルダンディーと結婚したんですもの、「お義母さん」って呼んでくれていいのよ」

「その結婚について、あたしは話があるんだけどね」

「あ……はい」

固まる螢一であった。

「とにかく、奥へ上がって下さい」

ベルダンディーの案内で「みんなのティールーム」に場所を移した。

テーブルの上にはお茶菓子と人数分の湯呑。

螢一の対面に鷹乃さんがすわり、ベルダンディーの対面にアンザスが座った。

まずは、鷹乃さんから。

「さて、事情をたっぷり聞かせてもらおうか。桂馬くんと私に黙って結婚したこと、しかも報告もしなかった理由」

「えーと、それはその……」

間にアンザスが割って入った。

「二人は確かに天上界での婚姻を認められましたが、地上界ではまだ婚姻届を出しておりませんよ」

「え？ 天上界？」

「ベルダンディーは私の娘、神属ですもの」

鷹乃さんは額に手をあてて。

「まって、頭が混乱してきた。天上界とか神属とかいったいなんなのよ」

「では、私からご説明しましょうか」

アンザスは螢一とベルダンディーの馴れ初めから魔界での「大魔界長失職騒動」につながる二人の結婚までの経緯を、簡潔にしかも要点は絞って丁寧に話をした。昨夜の螢一とは段違いで懇切丁寧なことこの上ない。

噛んで含んだ説明はよほど消化が良かったらしい。

鷹乃も理解したようだ。

「なるほど、ベルちゃんが天上界の女神様ね。前にこっちの来た時からなんとなくそんな気はしてたけど」

「いえ、今は休職扱いになってまして」

「ベルちゃん、それはいいのよ。――で、螢一。なんで二週間も連絡しなかったの」

螢一は、ここは御託を述べるより、素直に頭を下げるべきだと判断した。

「すいませんでした!!」

と、その場に土下座をする。

「よろしい。許す」

螢一は座り直すと。

「あらためて、鷹乃さんに俺たちからお願いがあるんだ」

「お願い？ まあ、聞くだけなら聞いてあげるけど」

「婚姻届の証人の欄に鷹乃さんの名前がほしいんだ」

ベルダンディーが何処からか記入済みの婚姻届を出してテーブルの上においた。

「お願いできますでしょうか」

「つまりこっちでも正式に結婚したいと」

「駄目でしょうか」

ふむ、と考え込む鷹乃。

「その前に、螢一に二つ質問がある。返答次第では記入してあげる」

「質問て」

戸惑う螢一。

鷹乃さんは少し間をおくと。

「まず一つ目、螢一、あんたは生涯この娘を命がけで守る覚悟はあるかい？」

「ああ、もちろん」

「いい眼をするようになったね、うんうん、少し見ない間に男を磨いたもんだ。では二つ目の質問。あんたは大学を卒業して何をしたい？」

「え……なになって」

戸惑う螢一に鷹乃は畳み掛けるようにして。

「あんたの将来のことを言っているのさ、まさか一生、小さなバイク店のメカニックで過ごす、なんてわけないよね。桂馬くんにも言われたはずだよ」「男ならいくつになっても胸の奥底に大きな絵を掲げておけ」って」

「将来、将来か……」

はじめて「大きな絵」の意味を知る螢一。

漠然と今と同じような生活が続くと思ってたけど、違うんだな。

今はいつか終わる、でも終わりを決めるのも、また今に掛かっているんだ。だったら俺の目標は一つ。

「俺は自分のバイク店を持ちたい。バイクが楽しいものだってことみんなに知って欲しいから」

「バイク業界は斜陽業界だよ。よほどの金持ちか物好きでないと手を出す人はいないだろうね。それでもかい」

「もちろん、だからこそやりがいがある」

「本気みたいだね。わかった——ではベルちゃん」

「はい」

「あなたはどうするの？」

「私、私ですか……」

螢一さんは自分の夢を定めた。だったら私の答えも決まっている。「私も螢一さんと同じ目標に進みます。妻になったからではありません。私自身が螢一さんと同じ気持ちだからです」

鷹乃は目の前の湯呑を持つと一口すすった。

「美味しいお茶だね。いい奥さんになるよ。ベルちゃんは」

「え、それじゃ」

鷹乃は湯呑を置いてニッコリと笑うと。

「婚姻届にサインをしてあげる」

座り直して背筋を真っ直ぐにした。

「愛はお互いを見つめ合うことではなく、ともに同じ方向を見つめることなのよ。見つめ合っているうちは恋。だけど同じ遠くの方角を見つめることが愛なのさ。……桂馬くんの好きな言葉だけれど、そもそもこれは誰の言葉だったかしらね」

ふいにアンザスが。

「サン||テグジュペリさんの言葉ですね。私からも同じ人の言葉を贈りましょう。「計画のない目標は、ただの願い事にすぎない」」

戸惑う螢一とベルダンディーを見つめて優しく微笑むアンザスであつた。

「難しく考えることはありません。大きな目標が決まっていれば、おのずと達するべき道も見えてきます。まずは螢一さんの大学卒業ですね」

「——ただし！」

鷹乃の一喝が入った。

「生活が安定するまで子供は我慢しなさい」

「あ、いや。お金のことなら私が」



「ウルドさんの気持ちはありがたいけど、それでは何時まで経ってもこの子達は自立できない、半人前よ」

螢一が遠慮がちに片手を上げた。

「人間と女神の間で子供ってデキるんですか？」

「確率は少ないですけど可能ですよ」

アンザスは一口お茶を啜ると。

「もともと神属わたしたちが妊娠するのは「女神のこの人の子供がほしい」って強い気持ちがあってこそなのよ。危険日にSEXしたからデキました、じゃないの。ましてや異種族だもの、螢一くんの気持ちも大事になるわ」

神属に「危険日」はないそうだ。

「俺の気持ちって……さすがに今の経済状態じゃなあ……」

「それから螢一、大学を卒業したら仕送りは止めるからね」

苦虫を噛み潰したような表情に。

「このご時世だから桂馬くんの仕事も減ってるからね。成人した息子をいつまでも養ってられないのよ」

「大丈夫、なんとかかりますよ螢一さん。ところでお母さまは本当に休暇だから降りて来てくださったのですか？」

ベルダンディーの問いにアンザスは慈愛の微笑みを浮かべ、胸の前で手の平を合わせると。

「そうそう、そうでした。これをベルダンディーに渡したくて」

手の平を離すと間から「光球」が飛んでベルダンディーの前の空間で止まる。

「これは……何かの結界のようですが」

「精神の物質化現象を封じ込める結界です。これからの二人には必要な物でしょう」

あと、螢一さん。

「あなたは女性に対してトラウマを抱えていますね」

「え……」

アンザスは人差し指を螢一に向けた。

横で鷹乃が「ああ、あれか」と一人で納得している。

螢一の身体が停止ボタンを押したみたいにならなくなった。

精神操作系の法術が発動している。

「お母さま、無茶です！」

顔色を変えるベルダンディーだが。

「私が失敗するとしても？ ええーと、どれかなーと、ああ、あったこれこれ」

天井に向けた人差し指の先の空間には鉛色に鈍く光る、一センチほどの玉が一つ。

「なるほど、小さい頃に女の子に暴行を受けてお年玉を取られた、って」

鷹乃が補足する。

「螢一ったら一晩中股間を押さえて唸ってたわね。結局犯人は見つからずじまい。お年玉も取られ損」

「それをどうするつもりですか」

「もちろん、こうするわよ」

ベルダンディーの問いにアンザスの指の先から鉛色の玉は消えた。螢一さんの記憶の一部を消すなんて。

「思い出もしない、むしろ害になっている記憶なんて無いほうがいいと思うけど？」

「私も同じ意見だわ」

アンザスの言葉に鷹乃が追従した。

同時に止まっていた螢一も動き出す。

「あ、あれ？」

「大丈夫ですか、螢一さん」

心配そうなベルダンディーに螢一はキョトンとした顔で。

「今なにか……？」

アンザスは微笑んだ。

「あなたのトラウマを削除しました。まあ、荒療治ですけど。このくらいするのが丁度いいでしょう。良かったわねベルダンディー、これで螢一さんSEX出来ますよ」

真っ赤になる二人に鷹乃が。

「まあ、初々しいこと。新婚はこうでないかね」

「素敵な「初夜」になると良いわね」

アンザスは目の前のお茶菓子を一口頬張った。

「うん♪ やっぱり美味しいわ、天上界で評判になるのもうなずけるわね。これは本格的に女神の何人かを地上界に降ろして修行させて、——ああ、でも「規約違反」なのよね」

「よかったら私がアンザスさんに教えましょうか？」

鷹乃の申し出にアンザスは目を輝かせた。

「え？ よろしいのですか？」

「もちろん、これでも二児を育てた母親よ」

螢一がジト目で。

「いやあ、それはどうかな」

「なんだってえ」

「水気たっぷりでベチョベチョの大福餅に焼きすぎてカリカリになったケーキ。鷹乃さんは他は完璧なまでに非の打ち所のない「母親」だけど「お菓子作り」だけは」

「いったわね！」

「だから「母親としては完璧」なんだって！ だけど「お菓子」だけは——」

「ちよつとこつちへ来なさい!!」

鷹乃に引きずられて別の部屋に消えていく螢一。

見送ってアンザスは。

「微笑ましいこと。でもあの様子だと「お菓子」はあきらめたほうが良さそうね」

「でしたら、私がお母さまに教えて差し上げましょうか？」

「んーでも、娘にお菓子作りを教えてもらう親ってどうなのかしら」

「地上界に良い格言があります。「細かいことは気にしない」」

いや、それ「格言」じゃないから。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
[http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel\\_id~30505](http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~30505)

---

ああっ女神さまっ After Stories

2025年03月13日 09時00分発行